

王 幹 · 麻 生 路 郎

川柳雜誌

三 月 號



大正十三年三月三日第三號郵便物認可

昭和七年三月一日發行(每月一回一日發行)

第九卷 第三號

川柳雜誌社發行

本社三月例会

日時 三月五日午後六時半
會場 大阪市南區千代町日本

橋北詰西の辻北入東側

ちこせ俱樂部

電話南二四五番

兼題「贈」三句 路郎選
講演題未定 長崎柳秀
會費 金參拾錢
出席者に兼題三光に呈賞

祝百號記念

廣告を募る

本誌五月號が創刊百號に相當するので柳友諸兄の祝百號記念廣告を募ります。絶大の御後援を祈ります。一口金五十錢幾口にても御申込下さい。締切四月十日限。

(切手代用參錢以下)

本社移轉

今般本社を左記へ移しました
大阪市西成區玉出本通三丁目
三六番地
(舊千本通五丁目から五六丁
南方です)

川柳雜誌第九卷第三號目次

文苑

一路集(募集句)

新居より
古机に倚りて

麻生路郎(一)
福田山雨樓(八)

表情
洋室

川村花菱選(七)
岩崎柳路共選(三)
中見光路

猿、正月、川柳(續)

前田雀郎(三)

續川柳家戶籍調

山雨樓(七)

川柳禮讚

岩本素人(二)

西之町MEMO

橋本綠雨(九)

柳の絮(子)

長野吉高(三)

編輯の窓

葎乃(六)

寶の帖漫興

蛭子省二(四)

創作

麻生路郎選(三)

川幽明無線電話(續)

秋農屋(四)

第一線

同

街の良

住田亂耽(五)

春秋點

安井ひろし選(三)

石の中から

平井蒼太(六)

近作柳檉

諸家(三)

月句の世界

ひろし、山雨樓(五)
琴人、杏三、町二

川柳塔

麻生葎乃選(九)

Rの友情

安井ひろし(二)

粒々集

各地柳壇

智慧の輪

片桐靈壺(三)

光耀抄

諸家(三)

かほるさん

吉田水車(三)

各地柳壇

麻生葎乃選(九)

三二風景

大久保大夢子(四)

各地柳壇

麻生葎乃選(九)

わが断片

龜井愚籠(五)

各地柳壇

麻生葎乃選(九)

懐き川柳家達

田中都之介(六)

表紙

大西長三郎

長篇と短篇

山本葉光(七)

題字

麻生路郎

鐵下地

鐵下地

鐵下地

鐵下地



新居より

麻生路郎

こごちのために働いてゐるKENちゃんが新居を訪ねてくれた。

彼は私の机上の古鐘をたたいてみて「朝鮮ですネ」ミいふ。そして「Fの音が出るから」ミつけ加へた。

KENちゃんは更に日本の釣鐘はCの音、支那の釣鐘はGの音が出ますミ云ふ。

KENちゃんに世の常の骨董眼はないが音に對する耳がある。一を知るこごちは十を知る。こごちだと思つた。

曾て講家のS君も此の古鐘の簡單な圖按を見て「これは朝鮮ですネ」ミ云つた。これは眼である。

川柳詩人の第六感は一足飛びに飛びかかつて朝鮮の古鐘を曾て松山に遊んだ時に手に入れたのであつた。



第一線

路郎選

着ぶくれてうなじがほそい膝の子よ

二階借りし頃を想ふ 三句

新妻の日はカンテキの煙にむせ
カンテキの炭の赤さがありがたい

龜ノ瀬トネル崩壊

隧道はへつびり腰でのぞかれる

男らの目姦に馴れ朝夕の電車
ノンストツキングの少女さ歩き少女の匂ひ
冬の汗が女工さんの體臭さなる

東風いたる、伊豫なる橘・筑紫なる藤井・兩君へ

早春の心を風に托すべし

山雨樓

同 同

同

二

同 同

同



Rの友情

安井ひろし

瀧洲に居る柳友Rは、「向つて右」を連發するので有名だつた。Rは僕とおない年で、一時、共に妻を失つた。僕は死なし、Rは離別した。

死んだRはRの東京時代をすいぶん苦にして居た。然し僕はRの意のままにする事も天意だと思つて居た。義理でいろんな事も云つたが、結局世間体になさなかつたかもしれぬ。

Rは無沙汰勝の僕に絶えず便りをくれるH令嬢を喜ばした舶來のレコード、エハガキ……それはいとも朗らかで、とてもスマートなメロディを奏でてくれた。そして遙かなハルピンの脊を思はしてくれた。

ドンマイこれは、亂耽君のK麻雀荘の晋さんがよく口にした支那の錢だつた。これを贈つてくれたときは、死んだ晋さんの母親を思ひうかべた。

Rが丙午の妻君を貰つたので、僕も丙午の人を貰ふかなど、考へる。いま僕はRからの

折靴靴のかゞこがありません
 ベン先ミ菫セツトがあるばかり
 海鳴りにすぎき焼寒う呑んで居る
 號外の行く手子供 の 戦ごこ
 如月の水の光りへ 懐手
 あしたから儲かる袴買ひに出る
 萬年床に何思ふ事のあるべきぞ
 生殖の意識もなくて風呂に行き
 ぎこで覺へたか伴紀伊の國
 膝枕しばし自嘲を忘れむか
 まごゝろにふれたも酒のまわる頃
 職にありつき朝の茶碗の音にゐる
 ラツシュアワー向ひの顔も光つて居
 一杯二杯三杯女給に皆のまれ
 肉親を罵り路次に住つて居
 子等は又空なら空で箱がほし
 ○

同 閑 同 鐵 同 杏 同 同 丹 同 同 素 同 同 雅 同 同 綠
 生 州 三 路 人 幽 雨

贈りものトコハクのパイプで「バット」とそ
 して「スリーキヤツスル」を交々味ひながら
 欣女の寫真に笑ひかて居る。
 一九三二、二、一三

智慧の輪

片桐靈壺

其一

小學一年のS坊は食ひたくつて、たまらな
 い葡萄を食へさせないのが、不平だつたの
 です。夕飯の膳から立つて欠伸を一つ投げる
 とポケットからお三時の餘りの伍助を出し
 て食べやうとしましたが、また突こんでしま
 つて「ママーあんなあ、僕の組のKがなあ、
 昨日な、葡萄を食つたつて言ふてたが今日も
 死にやがらへんで、何んでや？」とママへ抗
 議の瞳を向けました。

其二

ママは主婦の友博士であります。S坊は或
 日主婦の友研究中のママの側に立つてゐま
 したが真を繰らふとするママの袖を引つば
 つて「そこに書いてあるウに點々を打つた字
 は先生まだ教へてくれへんで……何んで讀
 むんや」と質れました。ママは即座にプと答
 へました。「ほんならねラッジーシーンでな
 んや」と再び質れました。

かほるさん

吉田水車

勿論いゝ意味での特異な存在、我がかほる
 さんはかほる氏でもなければかほる君でも
 ない、矢張かほるさんなのである。かほるさ

繩 跳 び の 影 を 見 て る て あゝ 樂 し
 夢 が さ め 我 の あ り か を 探 し て る
 瘦 せ に 行 く 靴 女 房 の 手 の 光 り
 金 の あ る の が 只 一 人 苦 り 切 り
 面 白 う 見 ゆ る ぞ 株 の き か 下 り
 下 女 の 恨 み が 口 の 端 を 籍 る
 女 給 募 集 さ 書 い た ま ん ま で 宿 が へ し
 十 人 の 戸 籍 巡 査 の 氣 が ゆ る み
 踏 切 を 越 す 極 道 の 速 い 足
 氣 が ゆ り な 嘘 を 云 は し て 子 を 見 つ め
 妹 の 延 び た 姿 へ 思 案 す る
 牛 の ろ り く 花 見 に 火 を 借 ら れ
 か ぜ ひ い て 枕 屏 風 の 畫 が 怖 い
 眼 鏡 く も れ る ま る き 心 に な り 給 へ
 貴 金 屬 か ま び す し さ の ま つ は れ り
 苦 し さ に 玉 手 箱 で も 覗 き た し
 働 ら き に 行 つ て 歸 へ れ ば 寢 に や な ら ず
 寒 空 の こ の 勤 め さ へ 羨 ま れ
 禿 け る ま で ガ ン デ イ ズ ム で チ ッ こ る

同
 豆 同 同 明 同 同 鮎 同 同 奇 同 同 裸 同 同 同 光 同 同
 秋 珠 美 愛 人 路

んには私は私の浅い作句経験から句會では
 僅々十數度しか御指導をねがつてゐないが
 親しく酒席に侍る事も兩三度得た。そしてか
 ほるさんの奥藝の片鱗にすら接したもので
 ある以上作家かほるさんを語るより句後の
 人としてみる方が私として好ましいことに
 思はれる。かほるさんはうれしくも國粹保有
 論者であり實行者でもある。それは本年の
 新年句會後の懇親宴に或る洋食堂へ行つた時
 に豫期したこと。乍らその食堂で洋食以外の
 料理を發見し得なかつたか、ほるさんは我々
 の待望を無視して迄さつさつと踵を廻らされ
 た。皆も私も淋しく思つたが、強ひて留めな
 かつたのはかほるさんをよく識つてゐたから
 である。かほるさんにフオーケやラインカツ
 プを強ひるのは川柳を奪ふのと、同じ苦痛を
 與へるのだと思つた。(一九三三、二、二二)

三二 風景

大久保大夢子

大和川のドン底に居る。大総が陽氣の加減
 かのたり初めた。村の人は逃げて行く山や畑
 を我子の臨終の様に悲しんで居ます。最初私
 が行つた時は不安に怖えた。村の人が右往左
 往して居ました。二度目に行つた時には青年
 團の涙ぐましい奮闘振りを見せられました。
 三度目に行つた時、一日に五六人の乗降客し
 かない驛はまつ黒な人山で、現場には地圖を
 賣る者青年團の机には、白銅が山の様に積つ
 て、山道の兩側には、パン屋、みかん、ラム
 ネ、おでん屋、上かん屋……丁度田舎の秋祭

懐にお金があつてよくしやべり

丸山公二君の結婚を祝して

朝刊が窓から覗く新世帯

静脈が骨にからんでるだけの手

布團が皮膚さなつた生活

わが生命南京玉さなつて散れ

鶴嘴の上がるさ池にうつるなり

鱗が板に附いてゐるのが目立つ日だ

はや起きて汽笛を鳴らす人になり

樂天家君へ

世渡りへものゝあはれを少し知れ

道樂が生きてく鍵さなつて來た

掛軸へ心のよごれあるさ知り

不孝な子へ珠數サラ／＼眼をつむり

氣附いてゐる無駄もなほせぬ忙しさ

師匠さう思うさ節を代へて見る

顔がみなピンほけさなつた春の夜

貞操はさくさ忘れたコムバアクト

忙殺の中に身弱な俺がゐるた

同

同

同

同

同

計

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

太

蒼

同

同

加

同

郎

同

同

樂

同

同

夢

同

同

同

の風景であります。私はこの次に來るなれば「あらつしやいませ」の彼女が跳躍して居るだらうと思ひました。おもろい三二年風景！

わが斷片

龜井愚龍

▽あなたは川柳人ですか、毎月々々欠かさず熱心に投句してあらつしやいますか。

イ、エ、私は人間なんです。

▽しづかに人生をみつめ、生活を想ひ、そうした後に私の句は出来るのです。

乞食の生活を考へてゐた時には、乞食の句かなしいことを考へてゐた時には、かなしい句、社會制度の、不合理に矛盾に、血を燃やしてゐるときには、燃えるような句、こんなやうにして私の句は出来るのです。

▽私は川柳に追はれることが嫌ひなんです。Aの柳誌の一切は何日だ、Bの柳誌の今月の課題吟は何と何だ。こんな言葉を聞くと私はなんだか川柳を、強ひられてゐるような氣がして嫌な氣になります。こんな私ですから句會で句をつくることもあまり好まないうです。

▽私は川柳に捉はれることが嫌ひです。

意識的に、川柳をこしらへようとして、ものを考へ出すことも好みません。しかし、この域にはまだいへないやうです。句帖をみてあまり句が出来てゐないと、一つ川柳をつくつてやらうかと考へ出します。が、こんなときには自分の氣に入つた句が出来ないやうです。

▽私はごちらかと云へば、作句數の少ない方らしいです。これは、單調な、儂れた詩人にはこんな言葉はないかも知れません。病院生

の風景であります。私はこの次に來るなれば「あらつしやいませ」の彼女が跳躍して居るだらうと思ひました。おもろい三二年風景！

村のスケッチ

村人よ銀バス夕陽の中を行く
 定期券切れてそれから歩くなり
 梅幸の枯れて居ります菊人形
 勝算ある刷毛か顔に從ふ
 酒断てば冬の夜空に似て淋し
 椋鳥へ寝巻のまゝで銃をさけ
 からくりの世界の紐も切れ果て
 更生の山は大きくひろがりて
 親牛子牛首をならべてあたゝかき
 叩頭の一手で萬も貯めてゐる
 牛のちゝ戀を戀する目にさまり
 まあ奥様嘘ばかり嬉しさう
 父ビーキばかり娘笑はれる
 悪ふざけおびへを娘肩に見せ
 摺鉢の底にも似たる暮しなる
 これベルト廻つて呉れな失業苦
 一時金疊の上へ並べられ
 バンクした音、大都會、大都會
 ◇

同 水 同 都 同 桂 同 觀 同 靈 同 濁 同 夕 同 紅 華 小
 車 之 介 枝 月 壺 水 鐘 水 柳 子

活のせいもあるのですが、一つは以上のやうな作句態度を持してゐるせいだと思つてゐます。随つて、私の作句数が比較的多い月はそれだけ私の精神生活が豊富であつたといふことになり、句数の少ない月はこれと反對の結果を生むわけであります。

▽川柳は第二義的のものであり、生活、と云つても範圍が廣いわけですが、こゝでは重に内的生活を意味します。それが第一義的のものであると考へてゐます。しかし、この言葉は今まで多くの人々が言はれておられましたので、すから私の口からいふのは少しく耻かしい氣がいたします。

▽川柳とは——川柳の道とは——
 裸になることだと考へてゐる私です。少しく生意氣な言葉かも知れません。

懐しき川柳家達

田中 都之介

まだ川柳を始めた當分の事である。其の頃天神通りにカフエー千龍の云ふのがあつて番傘支部の句會が、その階上であつた事がある。其所のコツクさんが、とても熱心な川柳家で肉を焼き、そのかたはら作句して階上の席上へ持つて上る一枚のテキを焼き終る。頃にはチャント四五句の句箋が出来てゐる。「うっかりしてテキをこがすな」なんて皮肉がと彼は田中紫想と云つた。今はこのカフエーの跡方もない紫想さんも何處に居られるか消息もない。が熱心な川柳家紫想さんは人形の様だつた女給N子さんの面影と一しよに深い印象を残されてゐる。

池田山紫君が入替してしまつた「すべり臺

三月の土まはなれり足の裏
 軋轢の中の自分もひざりなる
 御近所へ嫉み心が出る春よ
 決心をしたまは女さうする氣
 貸して呉れよかる百圓男同志
 失業に淋しき物よ力こぶ
 拾圓さ道頓堀の春のジャズ
 悪友を思出させる店の暇
 群集は彼の女をもんで崩れ出る
 勝ち切つて拍手の悲哀廻り来る
 同窓に會つて事務服氣がおくれ
 戀人に自炊の覇氣をさけすまれ
 仲裁の言ひ少し味方じみ
 閉鎖した如く入齒の型を取り
 目論見の出會ふた人も數に入れ
 ビルディング上半分へ夕日映へ
 お正月日本は着物の國なりき
 逢ひたさの神の御前をはからず
 天秤棒の先きへ希望の荷がしはみ
 百舌の贅母は念佛繰返し

没食子 同 同 同 不 同 同 露 同 勝 同 耕 同 柳 同 如 同 方 同 翠 同 湖 同 虛
 然 斗 二 民 兒 空 眠 峰 山 白

二人で降りた日が戀し……都之介
 彼とは竹馬の友で、川柳界でも同じ歩足を揃
 へて進んで来た。みずく會同人としても働
 き手として心強き限りではあつた。
 が彼は又實に多趣味で歌人としても、短歌
 誌「裸馬」の發行者であり將棋、蹴球の如きは
 免狀無しとは云へども有段格で注將、碁が彼
 を見ると手を振つて断る程であつた。
 滿洲動亂等を語るに目をむき腕を撫て豪
 語してゐた彼をしばし見る事が出来な
 語なつかしい川柳家と云へば、鏡川支部の人
 々を思ふ。伊藤緑之助さんからはときたま御
 文通に接し乍らまだ顔を合せて語つたこと
 がない。出雲地帯の番傘網に對して只鏡川
 松江のみあるは心細いと云へば、心細い限り
 ではあるが唯意氣あるのみである。此の意氣
 に於て鏡川支部の方々の愛慕は痛切に感
 ずるのである。

長篇と短篇

山本葉光

十二月號の「火華」欄で天地人氏が、直木三
 十五氏と川柳家に「耻るが、い」を讀んで大
 變に嬉しく思つた。實に直木氏は不屈至極な
 放言をあらゆる物に對して云ひ過ぎてゐる。
 實際我まゝ過ぎる。その我まゝは親愛するも
 のに對する態度だと思ふが、貞柳の狂歌論の
 飛沫として「大阪には川柳家なごは東京より
 盛らしい」と書き出して「精神生活が完
 全に表現されるならば、其の人を輕蔑しても
 い」と云つてゐる。

佐藤紅綠氏の「愛の順禮」の巻頭に、

夕時雨順禮の子が泣いて行く。

の句で「自分の考へてる事を他人に解らせる
 には小説は便利な様だが、(十二頁下段へ續く)



古机に倚りて

福田 山 雨 樓

舊臘「川柳を導くもの」に付て執筆中、未だ脱稿せぬ内にあ
わたくしう歳末が来たので三二年に持越ししてゐる、しかしもの
を書く爲めには色んなことを考へる結果、頭の整頓も出来るし
信念を深めることも出来るので、ペンを持つことを心から祝福
し且つ感謝してゐる。

川柳を導くものは決して少くない。柳誌、大家、句會、名句
句評、柳論、等々——けれどもこれ等は一つの間接な媒材に過
ぎないと思ふ。ほんごうに川柳を導くには、川柳家自身の自
覺が何よりも有力であり、現實的だ。ミ云ふ結論を捉えてゐる
自覺ある川柳家！それは川柳を永久に止めぬ人の頭に落ちる
名稱である。一角自覺ありさうな口をきいたり、川柳熱にうか
されてゐるやうな熱心振りを見せても、時よ時節でびよこく
川柳を見限るやうでは眞の自覺ある川柳家は申されない。い
わんやそんな川柳家が川柳の向上を發達について導くなきは
考えられない。自覺は川柳をあくまでも自分のものにするこ

いふ大前提の下に打ち立てられたものであつてこそ初めて意義
があるのだ。生活や境遇や思想が一寸やそこら變つたからミテ
川歌も序でに止めるミ云ふ様な御都合主義の川柳なら、大きな
眼で見れば徒爾である。贅澤も云へやう。殊に川柳がまだ
く下積にあつて、短歌や俳句の現状から遙かに遅れてゐるこ
ミに、不満の義務をもつ川柳家、ミつては、層一層腕に撚りを
かけて川柳の向上を進展の爲めに盡すべきだ。そこ迄の決心ミ
氣慨ミを持つてこそ初めて自覺ある川柳家ミ云ふべきである。
一生川柳をやらうミ手を握り合ふ川柳家でなくては、心から近
寄れるものではない。しかし或るものは云ふかも知れぬ「一生
川柳をやるつて、そんなことがミうして斷言出来るものか、そ
んな窮屈なことは嫌だ」ミ、それなら答へますが「あなたは川
柳を初めから中座するつもりで始めたのですか、それ御覽なさ
い、さうではないんでせう。だからミこん迄やつたらいいで
はありませんか」

それから折角川柳に手を染め乍ら自分には川柳の才がないとか、川柳が嫌ひになつたとか、川柳を作る餘裕がないとか云ふことは、自覺ある川柳家の決して口外する言葉ではない。又そんな弱音に耳を傾ける必要はない。志を同じうする川柳熱心家のみが手を握り合つて進んだらよいのだ。

自覺ある川柳家もこゝ迄來るこゝ世話はない。

○
こころがそんな強氣で居ても現實の問題として、續から續へ自覺を持たぬ川柳家の形が消えて行くのをさうするか。それどころではない。初めから川柳の存在すらも知らず、又知つても全然間違つた智識しか持たぬもの、或ひはさうしても川柳に關心を持ち得ぬものがざらにあるこゝをさうするか。

自分獨りの自覺はまあいゝにしても、是等の悲しむべき事實をさう導いたらよいか。

茲に於て、川柳を導くもの、云ふ問題は益々擴大され、現實化されて來るわけだ。しかしこの問題はさう簡單に速急に解決のつくものではない。現實の問題になればなるほど複雑困難だ。そこでこの問題の正面的對策研究は暫く預りのこゝとしておいて、退いてこちらの陣容を振返つて見るこゝにしよう。

○

僕は曾てこんなこゝを考へた。「お前か川柳に對する最大の關心事は何か」を尋ねられたら「それは名句の推獎にある」を答へたい。こゝ、何故つて、川柳の特長或ひは妙味を云ふやうな

ものは、名句そのものによつて味ふのが一番捷徑であり又一番効果的であるからだ。徒らに澤山の駄句を列べたつて仕方がない。最もいゝ句。最も秀れた句を見せるこゝだ。

○
こころが現在の柳壇では、この名句の推獎を云ふ試みが殆んごない。僅かに課題吟を云ふ主として句の修練途上に役立てる云はゞ方便的川柳の部間で行はれてゐるのみである。しかもその選なるものも獨斷をやりつばなしでしかない。他から更に批判を加へるやうな場合がないのみならず、寧ろさうした獨斷をやりつばなしを一つの權威さへ見做してゐる。更に雑吟の方面では恐らくさうした名句推獎の試みはない。尤も句集はあるけれどもこれはざちらか云へば、商品價値に迎合したものが多し。賣る爲めの句集が尠くない。「川柳雜誌」では新年號で日本柳壇百人撰三句集を試みたが、前述の意味から大いに我意を得た事業だつたと思ふ。しかし結果から見ても名句が尠いこゝを評がある。

○
蓋し名句の擧揚を云ふこゝは頗る難事である。同時に柳壇の大きな仕事であると思ふ。

○
川柳本質の再吟味——云ふこゝを近頃痛切に思ふ。自分は先に「柳味を探ら」を書いて、わが「川柳雜誌」に於ける庚辰柳壇の一瞥を試みたのであるが、もつこゝ／＼掘下けて或ひは開き直つて考へねばならぬと思ふ。

○
云つて自分は川柳味の本質を狭く限定するこゝを目的とす

るものではない。川柳味も亦進化性のあるものだ。信じてゐる。

しかしそこにはそれを言葉で裏付ける、理論、主張を云ふやうなものがない。感情を分析し、溶解し、味得する方法を云ふのではない。感情を分析し、溶解し、味得する方法を云ふか汲取り方云ふやうなものがあることを考へたいのである。更にさうすることによつて鑑賞の度を鋭敏にしたいと思ふのである。これを端的に云へば句に對する議論を盛んにやりた

いと思ふのである。先達で五葉氏が言はれた「句がものを言ふ」云ふ消極的な言葉を積極的に建直したいと希望するものだ。「澤山の句をつくり澤山の句を忘れよ」云ふ言葉がある。しかしこれは大きな反語であることを知らねばならぬ。即ち作句に當つては常に純な人間に立ち返つて、純な氣持で詩境を捉えねばならぬ。先入主があつてはならぬ。いつも素裸で詩を掴め云ふ言葉を逆に説いたものだ。更にこの言葉の上にならぬ大きな標題のあることも見落してはならない。即ち名句を得るには云ふ言葉である。句はどんな句であつても構はぬ句体をなしてさえおればそれでよい、云ふやうな考へ方は最も初歩に對する場合か、然らずば句を玩具視するもの、言葉だ。藝術の仲間にあつて、さうでもないとか、こんなつまらぬ句でも構はぬとか云ふ答案は零點だ。實に藝術は最も巧緻に、最も優秀に、最も洗練に向ふ機關車でなくてはならぬ。

一寸考へ方が行き過ぎたが、川柳味は句が發散するものであ

るが、時には無臭透明のものがあつて——その方が上乘なのであるが、現今のやうに句が横溢してゐる柳壇では見逃し易いものだ。しかし、句を見逃すことは確かに不作爲犯であると思ふ。

そこで句の價值、句の批判の眼を高く鋭くすることが必要視されるのである。

野球にアンパイヤーがある如く川柳にも選者はある。しかし更にスタンドを云ふ無數の凝視が野球になくしてはならぬものであることは、取つて以て川柳の嚴正批判の必要を暗示させずには置かないであらう。

その嚴正批判の眞只中で川柳味を云ふものが再吟味される。云ふことは、壬申柳壇のすばらしい感觸でなければならぬ。しかしそのことがセントルマンライクに進められなければならぬのは云ふ迄もないことだ。(丁)

九頁下段の續き

自分の考への十分の一も書けなかつたり、又妙に形が變つて現れたりするものだ」といふ最後に「複雑な心持を十七字に纏めようとしたのは、大變な間違で、金魚鉢の中に海を入れようとすると同じです。そこで私は小説を書きました。書いても、書き盡せませんでした。これで欄筆します」と十七字詩の腦み小説になつてゐる。實を云ふと小説なるものは(長篇を指す)大切な時間を浪費させて失望させ腹立しく思わせる物が多い、短かくなるものは出来るだけ短かくしてほしいと思ふ、その意味において短篇小説や隨筆や短詩を愛する人も、やはり病的ではないだらうか。終りに直木氏の言葉を借りて、「精神生活が完全に表現されない、長篇作家を輕蔑してゐる」と

距離あまり違ひ説明くたびれる

春

秋

點

路郎選

この勝負助言が悦に入るばかり
子の頭ボマードの手の拭きごころ
黄昏へシートノックのあわたし
杖ついて冥土へ急ぐ姿なり
風邪ひいた妻いぢらしく慾を捨て
だまされてゐる幸福を嗤ふまい
ドンファンの惱みをかすか乍ら知る
鬪病のプランに明けるお元日
チラト見る其の目くく惚れたのさ
お妾を圍ひ戯首考へる

此處も亦奥の手を出す店じまい
すきま風戀の場面こ成り切れず
追羽子へさすが日本の袂にて
平蜘蛛のやうにかしづく醫者なるぞ
酸素まだかき死ぬ病人が聞いてゐる
箆 箭 空 つ ほ 敷 居 も 軌 る

堀

同

同

同

大 阪

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

掌に薄幸線が這つてゐる

ヘッドライト戀の二人を見逃がさず

舞姫の姿になつたバラシユータ

座り直して顔色を讀み

法外な妻の望みに眼を閉じる

君の赴く國も瑞穂の國のうち

眞剣になるなく云ふ世相

誰の灯の母なき今年淋しめり

春はまだつぎはぎなれぎ逢へばよき

プチブルと言はれてそんな氣にされる

喜んで戦地へ行つたここにされ

つまづいて今日の不首尾を豫感する

新兵の靴ぬけそうな音で來る

さうゆけばよいのか墓の前に來た

總領に病まれ薬の氷のこ

あり丈けの智恵を絞つて春になり

忘れんが爲かお講がすんで三味

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

久方へ背なを丸めて話込み 同 あや美
 鏡餅を切るに夫は起される 釜ヶ池 松雨
 生きんこすおさげが笑へなくなつた 同 愚寵
 憂鬱を蟻拾つて行拾つて行く 大阪 夜王
 代書屋は野紙を金に積つてみ 犬山 練屋丁
 黙つて生きやう川の水は澄み 京都 初歩

病床雜詠

日本がまだ負けてゐない號外 堺 淋一郎
 笑はれて來ようが二人きりの宿 鳥取 暢山
 唇のよくもただれぬ女なる 大阪 利生
 陰險な手段大阪になれて居る 同 岩石
 紹介所たちのやうに潜り込み 同 素月

困つたな困りましたな大三十日 同 菊路
 天鵝絨のシートにした患者が來 同 愛緒
 血液の型に出て來た苦勞性 大聖寺 醉羊
 悦びをかくせぬ腹さなりました 大阪 一正
 許嫁其のまゝに春さはなりぬ 大聖寺 茶久良
 お尻で割込む婆さんに立つてしまふ 京都 草村
 役人の氣質が抜けず病み呆け 釜ヶ池 荅巴
 風邪で寝て四五十圓をしほられる 神戸 九葉
 共々に酔つて楽しい肩さ肩 大聖寺 水玉
 病みがちな母が縁談ひさり急き 金澤 たし路
 すんなりさ姉寒いのを我慢する 福島 狂水
 自轉車で運ぶ時計に音がする 京都 甫三

近作採稿

ひ ろ し 選

獨り身の鹽に茶漬の日もあつて 鳥根 羅門
 哀戀の刷毛バラくミ落ちるなり 同 同
 愛兒の足袋まつか眞冬 同 同
 初戀の帯がゆるみし春さなり 同 同
 でも臺所に明るいお前だつた 同 同

地下鐵作業
 太陽を見ぬ文明の基礎工事 大阪 雨町
 苦學して月給取りになつただけ 同 同
 村の百姓たち
 けに長き忍苦なりしが此處に起ち 同 同

純情をもちやそびにする資本主義

同

三一年二月六日母逝く四十六才

(二〇)

三一年母をさらつて暮れにけり

松江 天痴人

母逝きて見直す父の頬の髭

同

失職はすれぎコールの縞はよし

大阪 沐天

漂泊の明日を語れ北斗星

同

再び下宿して (二〇)

十年も居た氣で煙管長う持ち

高岡 かずま

因縁は古巢にかへる將棋盤

同

宵闇の銅貨は寂し

大阪 里美

ガスタンク細民街に肥るなり

同

他に楽しみはないやう繩をなふ

長野 有爲郎

多趣味さは金ある人の事を云ふ

同

猫の背へつぶてきなりしカレンダー

大阪 香樹

霞路深く住みて萬年青の世話をやき

同

看護婦にまでセルモットな言はれ

同

順れなれしうしても看護婦对患者

同

理話の戀のさうにも酔つばき

大阪 洋々

金暮して髭も剃つてす

同

ポリーナスヘグット兩手をさし出した

笠置 雀子郎

元旦よ酔のさめないうちに來い

同

豪壯な構への中に粥で生き

大阪 憲坊

注連飾去年の釘はさびたまゝ

同

なにか握つて暮の街へ出る

東京 蒼梧樓

すてばちになつても見たい病み疲れ

同

號外へ母も覺えた馬占山

大阪 小松園

金高に見積つてみる天守閣

同

口笛へためらう娘の戀でした

松江 陽子

溜息へ十九の艶の波うてり

同

元日の宵賑はしゝお光りの數

大阪 大夢子

二圓也手品を習ふモーニング

同

諦らめた心重たき冬の空

松江 硯滴

貞操は安價なものさ弗は知る

同

母なし娘を哀しむ

簪の嬉しさ知らぬ娘に育ち

大阪 拓二

思ひ直したたもきを軽く風が抜け

松江 巷二

常盤津ばかり青く見えてる

大阪 卜居

漏る雨に老のさみしい膝頭

島根 若星

うつぶんの障子は空虚な響き立て

大阪 呑吸

眼鏡越しその輕卒をなぢられる

名古屋 鳳石

ボーナスは別に萬歳聞きに行き	一人の酒にも春を酔ひ心地	一生を區切る愚かさ餅をつき	カーテンへ戀の手垢をまたなすり	元日を末頼もしい子ミ語り	ほろ酔ひの足に疊は冷えて居る	兵隊の歩調戦さの音を立て	諦めて歸る姿の泣いて居る	初霰友の國へも行つこくれ	就職の明日の弟の光る靴	言葉の上の愛に空虚が出来し春	童心が失せ行く俺にまぶしい陽	母さんをかゝへて通る交叉點	甘栗が好きだ彼女も好きだった	大晦日乗換券が八枚目	斷髪に温泉の神の祟あれ	寒大根洗ふを見てる懐手	寝るのに時間だなきゝ又藥	プロの子よネブッコだけで満足だ	バスの中上眼を使ふ髭が居る	
大 阪	大 阪	大 阪	神 戸	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	高 知	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	山 口
鏡生	雪丸	八步	秋彦	晴夫	青兒	柳人	木公	虹一	葉光	比呂詩	坊茄子	英賀夫	一笑	鴉天	鯉友	暢山	詩郎	宙芥		
待呆けてネオンに脈のあるを知り	小姑の皮肉に女房は瘦せて行き	ごつしりご正月の座へ鏡餅	病床へ三度目の春が來そうだ	久々に逢ふオールドミスの改たまり	現實の社會に希望つき當り	正直に愛してますご云ふ娘	まつすぐに聞けば女はごもつて居	胎動にハット寢返る午前二時	外聞を捨てれば生きる途もあり	千人針洋髪地味に縫ひつゞけ	檢温器の支配下にある大男	何ですごつけんさんの下女の顔	共椽ぎ火鉢のいらぬ冬がすぎ		賽銭の中の銀貨を數えて見		飛行機で夫婦東の旅にたち	片えくほその可愛さを抱きしめる		
大 阪	大 連	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪
白柳子	薰	えいを	芳朗	耕朗	富美三	白峯	正司	水人	青米	曉鳴子	幽光	笑喜	幸村	羽衣	錦石	安鬼美	靜香	紡線娘		

住吉參詣

施療院にて



月評 句の世界

ひろし
山雨樓
琴人
杏三
町二

川柳塔 山雨樓提出

干物の下を潜るも集金人

新水

山雨樓―集金人の氣骨の折れる生活を上手に叙してゐる。狀景から受けとる感じとして干物なんかしてある裏から廻つてゐるのだらうと思はれるが、その干物の下を潜つてまで用件を達しやうとする集金人の苦心がうかゞはれて、「沫のユーモアが漂つてゐる。只叙法の上から「潜るも」の「も」が理屈めいて難である様だ。

琴人―大方山雨樓氏の説で、この句は盡されてゐる様だ。この句を讀むと職務に忠實な事

を思はせられる。對他的に見た物をそのまゝ纏めたのではなくして、しつかりと自分の物にこなして、そして生み出した處にこの句に價値を生じたと云ふ事が云はれるだらう。杏三―日常茶飯の寸景を見逃がさず、句にまとめた作者の精進振りに敬意を表したい。先程山雨樓氏が「潜るも」の「も」が理屈めくと云はれたが、この場合には「も」があるので句の中心點が出来てまとまりよくなつてゐるのではなからうか。琴人―この「も」が中心點である事はお説の通りです。同時にこの「も」に少しく批難される點があると思ふ。あながち「も」としなくとも他にリズムの上から用ふべき文字があり

さうに思ふ。難はこゝだけでせうね。「も」はきつすぎるですね。

山雨樓―この句の「も」はこれしか仕方がない様に思はれるが、「一体「も」と云ふ言葉は大抵の場合ひびきが強すぎて句の持味をそこれる場合が多い。これは川柳家が詮案に走る餘弊であるかも知れませぬ。

杏三―「も」に就ては勿論そう云ふ批難もあるわけですが、又句に餘韻を生ずるのに非常に有効適切な事もあります。

琴人―とにかく句が滑らかに行かぬと云ふ事は云へると思ひます。(この時ひろし、町二兩氏出席)

近作柳樹 杏三提出

退屈な人に蜂の糞潰された

芳夫

杏三―人生に於て暇があると云ふ事程尊い事はないのだが、又その反面に是程に有害な事もないだらう。何の罪もない蜂の巢が只人間の退屈をまぎらす爲に潰されたと云ふ事に對して作者の感じた義憤を句にまとめたものと思ふ。

ひろし―作者は病院の窓から實際に蜂の巢を潰されるのを見てゐたのであらう。だが僕には、この句を蜂の巢の事と考へずに人間が

一生懸命にやつとこさと作つた労働組合とか或はその他の一つの團結を、むざ／＼とあつけなく潰される様をさへも思ひ浮べる事が出来る。

山雨樓—それであつて、而も僕にすればこの句にユーモアを感じる事が出来る。と云ふのは蜂の巢の賑かさと云ふか、複雑さと云つたものの真下に退屈な人間をもつて来た事はその事自身がたしかに滑稽である。只難だと思はれるのは、この句に作意が或は寓意が餘りに顔を出しすぎてゐる様に思はれる事だ。杏三—私はこの句からユーモアを感じる事は出来ない。只感じるのは句の背後に隠された作者の憤りに満ちた目だけである。

山雨樓—けれども義憤とすれば表現が弱い。ひろし—その點はあるね。
町二—それは「潰された」に依るんでせうね若し「潰されし」としたら句の内容が變りましか知ら。

ひろし—「き」では如何でせうか。
琴人—始めにかへりこの句を見ると、義憤と云ふ様な大きな物又暗示と云ふ様なものはこの句の構成法から見るとそう云ふ期待をもつて咏はれてゐる様には思はれない。只偶然か乃至は作者が見たゞけの刹那を詠つた

としか受けとれない。

光耀抄 ひろし提出

お茶漬がおいしい母の三ヶ日

吟 女

琴人—平凡だな—
ひろし—平凡だなあと云ふけれど仲々この句は丁度お米の茶漬の様に平凡な中に味のある句だ。

琴人—お説の通りです。

ひろし—僕は今迄餘り母親と云ふ者に對して感興を持たなかつたが、昨年十一月に母を亡くしてから妙に母と云ふ字に氣を引かれる。亡くなつた私の母も矢張りお正月にはお茶漬を喜んで食べたものである。實際お茶漬の如くサラ／＼と詠み得て妙だと思ふ。

琴人—僕はこの句より「晴着たゞめばクシヤ／＼の年賀狀」の句の方が、作者の好い處が出てゐると思ふ。

町二—實際論でゆくと、酒を飲み御馳走を一番よく食ふ主人公の方が、お茶漬をおいしいが實感が深いと思ふが—

杏三—色々な御馳走があるにも拘らず、お茶漬をおいしいが母の、内面的に苦勞の多い而も表面上至つて平凡な日々の生活を叙し得

て巧みだと思ふ。

ひろし—日々の生活ではないのです。之がお正月の三ヶ日であるからこの句は生きてゐるのです。

琴人—左様です。「三ヶ日」とあります。奢りを好まない人妻としてつゝましまやかな生活が現はれてゐる。

ひさし—人妻ではありませぬ。このお母さんは多分年老いた寡婦で作者夫婦と共にゐて而も妻君である作者の母ではないかと思ふ。

琴人—その意味で寡婦とも言へない。僕の云ふたのはこの句の上から、母その人の氣持を述べたのです。

山雨樓—先程平凡云々の事が出たが、全く平凡な句だと思ふ。只味のある平凡と云ふ意味で見逃がしてはならないと思ふ事は、この頃の俳句でも盛にかうした境地が詠まれてゐる様だが、之は餘り句を作つたり技巧をこらしたりする事に厭味を持ち出した結果、平淡な境地を寧ろ好む様になつたのではなからうか。その平淡な境地の中にも作者の持つ感情の流れがいみじく出てゐる場合、而も其れが或る川柳味を帯びてゐる場合、決して棄てゝはならない境地だらうと思はれます。然し川柳が持つ鋭さや深刻さはそれはそれとし

て磨かるべきもので、この句の様な行き方も又違つた持味があるわけです。

町二—そう云へば、この句が母であるから生きたるので、前に述べた主人公等だつたらそれこそ取るに足らぬ平凡に陥入つたと思はれる。

春秋點 琴人提出

お母さん長い屈從てしたねえ

利 生

ひろし—女性の句みたいですね。

町二—そんな事はないでせう。

杏三—かう云ふと餘り評者の想像を語りすぎられるかも知れないが、私は亡くなつたお母さんの死骸に對して作者が、心情を吐露した句ではないかと思ふ。

ひろし—僕は苦しめられたお父さん(即ち夫)に死別した母親に對する氣持だともとれると思ふ。

琴人—僕がこの句を提出したのは、自分にははつきりとして、佛が見える様に感じたので提出してみたのである。今ひろし氏のお説の様にこの句を解釋すると、この句が實にいやらしい句の様になるおそれがありはしませんか。

ひろし—「屈從てしたねえ」の語から、夫に對し即ち作者から云へば父而も作者はその父親に多分の反感を持ち、そして母親に同情してゐたと云ふ複雑な人生の苦難の生活の終りにのぞみ、而もその時は既に人生の春を過ぎ冬も近づかんとする秋の年老いた忍從の母親を思はされるです。

町二—僕はやはりめぐまれないまゝで、死んだ母に對する子の獨白であらうと思ふ。生きてゐる母に對する言葉とすれば、やゝ厭味に受けとれる表現の様に思ふ。

琴人—聲を立てない内面の叫びだと僕は思ふ。

山雨樓—之は言葉の切れ端だ、句でも何でもないと否定してかゝつて見たい様な荒削りな處が眼に付く。言葉の切れ端、或は會話の断片でも句になる場合は勿論あるが、それはさうする事に依つて表現効果を高くしやうと思ふ場合に有効なので、餘り好ましい手法ではないと思ふ。

町二—この場合この氣持を表現するにはやはりかうした行き方の、他は無きさうに思ふ。

山雨樓—それは、叙法に選ぶ方の餘地がある様ですれ殊にこの句の場合「長い屈從」と云

ふ事を以て全てを物語らうとしてゐる輕卒さが眼立つ様です。

町二—輕卒ではなく、かうした切實な心を十文字で云はんとなれば、在來の型にはめるのは却つて他所々々しくなるから、言葉の切れ端の様に見える言葉の切れ端で投げ出すより他無い様に思ふ。若し例へば、この氣持をなもつと美化するとか、象徴か比喩かに依つて表現しやうとすれば、川柳を捨て、長詩に走る他はないので、こゝした氣持が川柳になるか、ならないかの問題だと思ふ。何んな素材でも川柳になるのだとは、云へないので、この句の場合、否定か肯定の他はない様に思ふが、

ひろし—太平洋洋に面して僕は馬鹿でした。路郎—この句等も極端に云へば言葉の切れ端にすぎない。而し吾々は之を明かに川柳だと認めてゐる。元來川柳の形式、殊に吾々の川柳の形式と云ふのは、之でなければならぬとか、この型でなければならぬとか最初からきめてかゝるべきではないと思ふ。全ゆる内容を盛る句を歓迎するが如く、形式も何んな變つたものでもいゝではないかと思ふ。尤もこの點では路郎師と私とは、幾分考へ方が違ふ様ではあるが、私は努めて自由に奔放に

寧ろ現在の川柳的形式を打破する位な意氣を絶えず求めてゐる様な次第です。而し之は「川柳雜誌」としての意見ではなく、私自身の私見ですから誤解のない様に祈ります。

杏三—私もこうまでつきつめた、はりきつた作者の心境を詠つた句として、最も選ばれた表現であり立派な川柳であり、詩であると思ひます。

山雨樓—つまり僕はこの句に買取られたくないんです。この句が偶々破調であり、違つた表現をとつたが、爲に餘りに問題視された點がありはしないか。

ひろし—この句はそんなに特異な表現であるわけでもなく、寧ろありふれた表現形式でもさうだいたしたものとは思はない。或は作者の作りものではないかとさへ思ふ。

山雨樓—そこで、買手がつりこまれ易い軽い魅力があるにすぎないのではないかと思ふ。

琴人—僕は、この句はそう軽いものとは思はない。寧ろ嚴肅な感に打たれる。上五の「お母さん」この叫びを少しく注意して見たなら、十分にこの句の何を云はんとしてゐるかは知れるであらうと思ふ。積極的な感じを消極的に詠つたと云ふ風にすら思へる。

第一線 町二提出

あゝ大空生れては死に生れては死に

豆 秋

ひろし—「あゝ大空」と云ふよりは「OH!大地」と云ひたい様な氣もする。

杏三—成程そう云へばその方が面白味が出てくる様ですね。

町二—僕は又反對に思ふ。「あゝ大空」でや、疎略的な作者の氣持を表現してゐるので、生物が生れて死ぬのは大地に定つてゐるんだから—

ひろし—「あゝ大空」と云ふと全ゆる生物と云ふ氣持であり「OH!大地」と云へば自分の身近かなもの、即ち子供が生れては死に生れては死ぬと云ふ様な事を僕は意味したく思ふので、この作者が子供を死なしてゐる様な氣がしたのでそう云つたまでである。

町二—「OH!大地」と云へば作者が驚いてゐる事になるので「あゝ大空」とは違つた氣持になりはしないか。

ひろし—僕は死と云ふ暗い驚きから云へばと云ふ様な意識からそう云つたまで、無論この句をそう訂正しやうと云ふのではありません。

琴人—「生れては死に生れては死に」この言葉がもう少しつきつめたものにしたならよいと思ふ。只自分としては驚かされた様な感じしか起らない。然し深く追窮すれば相當に内容があるが、それはもう評者がこしらへてゆくものになりさうだ。

杏三—私はこの句は餘りに概念すぎてゐる様に思はれます。

山雨樓—僕も概念と云ふ言葉には同感……「あゝ大空」は捨て難い境地を持つてゐる。この心持は今一步叙法に修練を重ねたならばもつと「生きた句になつたであらうと思はれる。

ひろし—作者のねらひは悠久なるものと亡ぶものと云ふ取り合せにあつたのではなからうか。

琴人—さうでせうね。

山雨樓—この句は前號で「あゝ大空生れては死に〜」と記載されてゐるので、「あゝ大空生れては死に死に」と讀まれる虞れがある。それではまづいと思ふし、作者の意圖も亦さうでないと信じられるが、句を書く場合注意すべき點である。

光 耀 抄

葭 乃 選

大阪房 子

父も出て風の糸ひく春の風
内容は軽く大きなボチ袋
ルンペンになれどは親も育てまじ
笑ふても泣いてもエロを持つ女
促婢を輪に巻く童謡の手にけんけ
晩酌へ娘が呉れしうにの壺
コロッケとロールキャベツに祖父決

大阪壽 枝 女

初春はみかんの色にまでも見え
にはのりの家にも銚をかけられる
晝飯のひこり漬菜が有れば足る
まだ寒いく河原の二月なり
囀の驚いたのかびたご止み
手風琴昔の耳に残つてる
秋草の模様の小片れ捨て難き

有田洋行の象に

明日居ない象へお話をやりに行き

神戸 茂 も よ

あしたつく餅に子供等ねつかれず

撫順松 代

太陽へ生きてゐる目をさしむける
なま傷が子のすねほうからこれす
迷信ご知りつゝ暦見て出かけ
正月を樂しむ娘氣がそろひ
再發をおそれてごつ寝るばかり

魚崎吟 女

お妾の父は紅茶が呑みきれず
妹が先に二人の母ごなり
鐵瓶のふたへ待人むすび付け
ハイお待ちさんご焼芋包まれる

大阪武 子

面白い程おかきが切れて晝を過ぎ
熱が下るごもウクレオンを持こ来い
すんなりご長女の足ののびて春
おかきボりご口數の少ない子
よい年が来よご鯛を買ふのなり
たつた七日の母ごは知らず泣く赤兒
お手酌を見かねて又も一つつき
こんな暖かい日も有り寒椿

登ヶ池 紅 葛

儉温器われれば縁起が良いさうな
なる様になれ体重がまたも減り
冬の道落葉ふみく冬道の道
梅の開花を待つ

大阪貴志 女

子の顔は母の天氣の掲示板
了坊の無邪氣に叶ふ敵はなし

大阪機見 女

元日のキネマで小僧むむりこけ
一本を引くに補助券まだ足らず
木村屋の窓の曇りに街は明け

堺 道 子

悲劇ありし見えすシグナルの青き
北風の店櫻草ふるへてる

春淺き一日奈良に遊ぶ三ツツ

奈良の春童女の頬の赤さから
二月堂善男善女たむろして

乃

彼氏の癖も嬉しさの極みなる
世の塵を拂ひフリイジャ鉢に立つ
金の塊がラツセルの音を聞く
風に靡く柳ではござんせぬ
金は及ばぬ山の靈氣や

籬の畫に題して

ひな壇の蛤沖が戀しかる

新居にて

窓を開けても六甲は見えず



川柳 禮 讚

岩 本 素 人

他の川柳を見て、これは實感句であるとか實感句でないとか言ふ様な立ち入つた批判は慎むべきであります。實感句でない所謂机上の句は、どこかに力が足りない様です。讀者に迫る何物もない空虚なもの足りなさを覺へます。句會で作られた川柳には斯うした句が多いのであります。何しろ一定の題を課して大勢の人が短時間に三句なり五句なりを作らうと云ふのですから當然の事でありませう。しかし句會の席題と自分の過去の體験の記憶とが偶然結合した場合などには素晴らしい名吟を吐く事も亦決して珍しい事ではありませんが之れ等は全く偶然の所産に過ぎないのであります。けれども句會へ度々出席する事に依つてこの「課題に就て自分の體験の記憶を喚ひ起す事」を練習させられるのであります。今一つ句會の利益は之れによつて作句衝動を誘發される即ち創作慾に刺戟を享けるのであります。豚は猪が家畜となつた爲に刺戟を亡つてボケたのだと支那人は言ひます。——あてになりませんが——ミかくさんな偉人でも刺戟を失ふと凡々化するものであります。此意味で句會は川柳道場として必要であります。私は句會の句に非實感句が多いと

言ひましたが、之れは決して句會そのものゝ罪ではなく作家か悪いのであります。私は三年大阪を離れてゐました爲に一年に一度か二度位しか社の句會に出席する機会を得ませんでした。が、半年振りか一年振りに出て見ますと來會者の顔ぶれが全然代つて居るのに驚きます。或る極めて少數の常連の外は來る度にに見知らない人達斗りなのであります。こんな有様では前に述べました川柳句會の眞の意義に添はないのであります。こゝにも川柳を遊戯とし道樂とし閑つぶしと考へてゐる人達の少ない事を痛感します。

川柳を道樂とし閑つぶしとして取扱つてゐる人達は會や募集吟に就て「今度は何句抜けた」ミか「天を取つた」ミか「地を取つた」ミかを無上の光榮と考へ、全没になつたりするものがつかりします。そして全没が度々續くミ來なくなつたり出さなくなつたりします。だれにても天や地を取つたり澤山抜けたりする事は嬉しいには違ひないが、「點ばかり取るのが作句の目的でない」ミ言ふ事に氣が付かないのであります。只々選者を對象として作句するのであります。初心者には有り勝の事ではありま

すが斯ふ言つた態度は——作句の上達を希ふ者には——是非改めなければならぬのであります。昔の俳人仲間でも選者を當て込んで作句する事を「點取り發句」言つて非常に卑しんだものであります。

此態度を改めるには、川柳は自分のもの、と言ふ平凡な眞理に氣が付けばよいのであります。然り、川柳は自分のもの以外選者のものでも豈んや其他何人のものでもあつてはならないのであります。川柳は自分のものと言ふ信念の上に立てこそ始めて本當に價値ある川柳詩、實感的な深刻な句を産む事が出来るのであります。

藝術なる詩である川柳を産む所の感動は實感的感動であり、實感的感動を外にしては詩の要素なる何ものもないのであります。

實感的感動と言つても必ずしも能動的なもの斗りを指すのではありません。無論受動的の場合、あります。自分から働きかける場合、他から誘發される場合のある事は言ふまでもありませんし又私の内なる一つの感動と他の感動との融合に依つて起る事もあり、其他雑多な衝動に由つて誘起されるものであります。

實感とは自ら體驗したる感情でありまして此の感情の動きを私は感動と稱へるのであります。實感とは人生の全過程に於ける體驗でありまして單なる外面的現象のみに限るものではないのでありますから、實感川柳は、必ずしも現實的たる事を條件と

しないのであります。事實は必ずしも實感ではないからであります。事實にして實感でない場合もあり實感であつて事實でない場合もあります。又詩の上に於ては科學的であると言ふ非科學的である言ふ無用の詮索であります。

實感川柳は偽らざる人間の謠であれば足りるのであります。其他何ものにも關與し且關與されないのであります。だから川柳家は自個の感情を心のまゝに唄へばよいので、誰れの顔色を伺ふ必要も更らないのであります。

川柳は川柳家丈けに與へられた川柳人自身の心の記録であります。心の記録は單なる事實の記述ではありませんから詩に綴るより外に、だてはないのであります。心の記録である所の川柳はこりも直さず人生の姿であります。否人生そのものであります。生命の文字であります。變轉極りなき人生の流れから酌み上げた實に命の一滴であります。なまなまこ脈うつ所の生きた命の一滴であります。川柳は自分のものであると同時に自分の命であります。生きた命であるが故に無限の價値を包む所以であります。詩を創る仕事は人生最高の營みであらねばなりません。斯ふ言ふ風に考へ來ります言ふ川柳を創る事に運命付けられたと言ふのは何たる恵まれたる我々であります。私共はこの恵まれたる詩を産む魂を瀆してはならないではありませんか。

我等は各自に與へられたる部署につき、しつかり大地を踏みしめて、聲高らかに唄うではありませんか。自分の川柳を、命の川柳を、川柳にかけた生命の無窮を信じつゝ。



猿 ▽ 正月 ▽ 川柳 (二)

前田雀郎

處で傳へられるが如く、果して豊臣秀吉はその容貌猿の如きであつたか云ひますと、近頃史家の間に問題になり、その畫像の詮索まで行はれて居りますが、これは秀吉が天文五年丙申の正月元旦生れ、しかしその母が日吉神社に願を籠め

日輪を呑むと夢みて孕つたといふ、謂はゞ山王様の申し子、山王様云へばお猿が三千三百何ミかで猿に縁のある神様の上に、始め申丸ミ名づけられ、後日吉丸ミ改められた云はれて居り、何から何まで猿づくめ、そんな處から猿に似てゐた云はれたので、猿の如く敏捷ではあつたかも知れませんが、そんなに人間離れのした顔をしてゐたのではなからうと思ひます。しかしこゝで秀吉は猿に似て

ゐなかつた云つて仕舞つたのでは、折角の川柳が役に立たなくなりまますから、暫く傳説に従つて猿田社者といふ事にして置きますと、なか／＼川柳でも活躍して居ります。

猿が寝てゐると橋番初手思ひ

ある本には、初手はいひ／＼もなつて居りますが、これは日吉丸時代、故郷を飛び出して、三河國の矢矧の橋の上で寝てゐたのを橋番が猿と思つて驚いたといふのであります。處が猿ごころか、野武士の親方蜂須賀小六をつかまひて大きに啖呵を切る、この出合ひがさうなりませうかといふ「太閤記」第一席の大讀みごころなるのであります。

松下は猿に小利をしてやられ

日吉丸、今川方の軍師松下嘉兵衛のもこに奉公し、元服して名も中村藤吉郎に改る、恰度その二十一歳の頃、いつまでもこんなごころにゐたのではウダツが揚がらないといふので、ある日嘉兵衛から具足を買つて來いよ命ぜられたのを幸ひにその六兩の金を持つてドロンを決める、かうして織田信長へ鞍を替へたのが藤吉郎の運の開き始めになります。

秀吉の馬印は有名な千成瓢箪で、今では五月の飾り物となり子供でも知つて居りますが、この始めは、信長が齋藤願興を稻葉山に討つた時、秀吉はその搦手へ廻り、持參の酒瓢を竹の先きに括りつけてこれを味方の目印とし、大手の味方と聯絡をつけて一氣に城を來取つて仕舞つた、この大功を記念し、これを馬印とし

爾來一勝毎に一瓢を加へて來たもので、眞ん中の瓢箪が逆についてゐるのはこの爲めでありますが、川柳にはこれを

千成や猿一ト筋の心より

と詠んで居ります、これは加賀の千代の

百成や蔓一ト筋の心より

といふ發句を擬つたもので、原句も大月並でありますが、この句も洒落が素直でなくあまり面白くありません。

かくて秀吉はさんく拍子に進み、その中に本能寺の亂、變を聞いて中國から取つて歸して光秀を亡し、つゞいて目の上の瘤の柴田勝家を賤ヶ嶽に討ち、同じく枕の邪魔の北畠信雄を長湫に討たうとして、さつこいご家康の邪魔が入つて、秀吉一世一代の大縮尻をする事になります、即ち天正十二年三月、小牧川の戦ひがそれでありませう。

小牧山猿の生肝ぬくところ

この時秀吉方は犬山に陣し、家康は小牧山にあつて、講釋の口調を借りれば短兵急に繰り出して秀吉方の前衛を一揉みにして仕舞つた。これには流石の猿面冠者も生肝をぬかれた思ひで、早速く和を講じたのでありますが、この小牧山の句には他に

柿より猿の先立つ小牧山

といふのがあります、この柿は徳川の四天王榊原小平太康政を指したもので、秀吉方の敗北を、その柿に猿が後々見せたと云つたのであります。この戦には柳原は本陣にあつて参謀をつとめてゐたので、直接秀吉とは戰場には見えませんでした、

したが、これは六月十五日の山王祭、九月十五日の初田祭の、隔年に行はれるその江戸大祭の行列にかけたもので、當日の行列は、先づ御幣が進み、次に太鼓、榊、神主、神馬とつゞいて、この後へ大傳馬町の諷破雞絹が一番で二番が南傳馬町の幣束をかついだ猿、三番が麴町の笠鉾の猿、以下何々山王四十五番、神田三十六番の山車が順を追ふて練り出す、尤も始めは山車の順序は猿が一番で、雞が二番だつたのを、ある年一番の猿が幣束を落した爲め、それを拾つて飾り直してゐる中に、二番の雞が先頭を切つたので、以來それが例になつて順が變つたことも云ひ、將軍秀忠のお聲が、よりで太平の象徴たる諷破の鶏を一番にしたことも云はれてゐますが、

下手の揚弓猿鶏が渡るやう

といふやうな風に「猿鶏」といふ言葉が文

政頭でもまだ使はれてゐるのを見ます。兎に角最初は鶏よりも猿の方が先きだつたやうでありますしかしいづれにせよ山車の猿が榊より先に出来る事はないのでありますから、もし猿が柳に先立つ事があれば餘程妙だといふので、その興味からかといふ句が生れたのでありませう。さうかうして秀吉はつひに天下を草履つかんだ手に振る事になりましたが、その榮華は一代、やがて他界と共に、梅も枯れて茂る尾花の關東に政權は移る、江戸時代に禁止を喰つた一枚縋に、信長が餅を掲ぎ、秀吉がそれをこねて、家康が食べてゐる圖がありますが全くその通りで川柳にも

永き代を猿骨折つて寅がとり

といふ句があります。寅は家康を指したもので、家康は天文十一年壬寅の十二月二十六日、三河の鳳來寺の峯の樂師の申し子として生れた、しかも家康誕生と同時にその鳳來寺の十二神將の中の寅童子の一体が、この寅童子は金比羅大將の化身ださうであります、それが姿を隠し後日家康他界と共に七十五年目でその寅童子が戻つて來たといふので、人々は家康は寅童子の生れ代りだましたのであり

ます、即ちその寅が猿に取つて替つたといふのであつて、また

大阪で一幕ぎりの猿芝居

なごいふのもあります、秀吉を詠んだ川柳も澤山ありますが、さうも家康が出て来るミ臺なしに詠まれてゐます、これは我佛尊しといふのが江戸ツ子こして徳川最負は尤であります、一方幕府でも「太閤記」を禁止してみたり、あまり秀吉を褒める事を喜ばなかつたその壓迫が、こんなところにも及んでゐるのかとも思はれます。

今の猿芝居といふ句で思ひ出すのは「會我」の狂言であります、これは昔から正月に居ま決つて居りますが、この「會我」がまた猿に關係をもつて居ります。あの中の對面へ出る朝比奈、この朝比奈の顔の隈を「猿隈」云つて居りますが、これは元祿元年三月、江戸山村座、市村座、中村座の三軒揃つて「會我」の狂言を出した時、中村座で朝比奈の役を初役で勤めた中村傳九郎があゝいふ隈を考案し、大當りをこつて、これ以來「會我」は春狂言に決る一方、朝比奈の顔もこれでは春狂言ならなくなつたのであります

朝比奈は額へ親の紋をひき

いふ句はその隈を詠んだものであつた、朝比奈の親の紋、三浦の三引だらうといふのであります、これは昔の川柳家らしい暢氣な見方で、これは前に申しました傳九郎初役の時いろく鬢に工夫して、最初は「かまひけ」其他を選んで見ましたが、さうも敵役めくので「かまひけ」いふ頭を用ゐる見る、顔が恰度猿のやうになる、そこで額に紅で筋を引き、目のふちに隈をこつてあゝいふ猿見たいな顔にして、舞臺では口を結び齒を出して睨らんで見せた、ところがこの傳九郎いふ人が生れつき齒並びのよい人だつたので、それが大變な人氣を呼び、芝居の方の司家も云ふべき猿若の家からその隈に對して「猿隈」いふ名稱さへおくられるにいたしました。爾來朝比奈に扮する役者は必ずこれに據るこゝになり、つひには草双紙の朝比奈の繪までがこの顔でないに承知しなくなつたのであります。朝比奈に關する句を擧げて見るこゝ

小林の朝比奈苗字ばかりなり

朝比奈はどうか松魚に酔つたら

朝比奈は御神酒の口で髪を結び 鶴の丸無理な烏帽子の置き所

なごいろうくあります、この鶴の丸といふのは、芝居の朝比奈の紋所で、最初は先程申しました三浦の三引を用ゐてゐたのであります、これは色氣が無いといふので、矢張傳九郎が工夫し、自分の家の替紋の鶴の丸を用ゐたのが吉例なつたので、川柳で鶴の丸云へば、これは朝比奈のこゝを云ふのださまで一般化されるにいたつたのであります。

かうして朝比奈に關する句、會我に關する句を拾つて行きます、限りがありませんが、せんから最後に一つ

揃ひけり五郎を留めて幕を引き

いふ對面の例の幕切れの引つ張りの見得を詠んだ、春芝居らしい氣持のいふ句を擧げて、このお話も目出度く幕にしたいと思ひます。

尙この他猿に因む句では、矢張り春らしい「猿若狂言」つゞいて猿田彦、江戸の名物として切通しの猿飴、猿屋の揚枝などあります、だんく、正月から縁が遠くなつて行きますので、この邊で一先づ終りこいたします。

(二月十七日夜、AKより放送)



街 の 良

住
田
亂
耽

殷盛な街にはどこかに狡猾な眼を光らした鷹がしつらへてあるものである。それはデパートの中にも、喫茶店の隅にでも、パァ、カフェーの灯の下にも、或ひは舗道のまん中にでも到る所に存在する。

私はこの街のトラップを、こまなく愛するのである。そしてそれに一つの趣味を感じる大抵の都會青年がさうであるやうに、經濟的に青春を消費しやうとして、無数の蒼白い人間の顔貌に、ひし／＼冬の街の壓迫を感じつゝ、S街の雑間の中に、時々喘いでゐる自己を發見するの、一つはこの趣味の爲である。

水の流れのやうに、行き過ぎる女、女に一つ、戀愛を感じて、そのまゝ、人の流れに合流してゆくのも、一つの近代都會情詩だ。

こんな事を考へながらの、空虚な私の視線の中へアドルフ、マンジフバリの中年好紳士が、唐突に大きく、クロンズアップに表はれて、口を開いた。「今、何時でせうか」「時間なら少し歩けば、向ふに、ほら、時計屋があ

りますよ」「ありがたう。然し時計屋には餘り時計が多いので、それが正確な時間か判りませんよ」「成程——とも思つて、半ば敗北の形で「では御隨意に」と行きかけやうとする、すかさず彼は「あなた、あの前を行く洋裝美人、お氣に召しましたかい。えへへ、お氣を確かにか」と軽く、それはいと親愛らしく私の肩を叩くのである。

妙な都會の寄生虫に出會はしたぞと、彼に若干の興味を感じ出して「あなたは一体何物です」と質問を投げかけやうと、口腔の中で構へるうちに、彼は引續いて第三の銃弾を溶せかけて來た。「僅か四圓二十六錢位の金を懷ろに大きな顔をして、よく歩けたものではないでせう」何んといふ、怖ろしい事を言ひ當てる奴だなと、之には最後のノックアウトされてしまつた。凄いモダン陰陽師だなと、心の中では全く悲鳴を擧げて、殆んど哀願でもするやうな口調で尋ねたので

ある。「あなたの御商賣は、八卦ですか」と「ノー、ノー、僕はサンドウキツチマンですよ」と朗らかに笑つて、人混みの中へ姿をかき消してしまつた。

薄氣味悪くなつて、ホケットに手を入れると、暮日は、はつきり存在の感觸を示して呉れたが、それと同時に中味は眞空だといふ事も餘りに悲しく、はつきり僕の手に感じたのである。

念の入つた摸掬だと考へながら、暮口を試みにあけると中から一枚の紙片があらはれたのである。

この被害を蒙りし日の午後正十時に
S、O、S、カフェーに來れ。

と、わざ／＼地圖まで書いてペンで走り書してゐる。暮口と言ふパトロンの失つた私はこの紙片を唯一のたよりに、そのカフェーを訪れるべく餘儀なくされてしまつた。

お定まりのジャスの狂燥、カフェーの灯は赤くそして青い。

S、O、S、のネオンの下、入口へ一歩足を踏み入れる瞬間に、停電だ。——聞

と突然に、一つの柔かい手が、私の手を握つて奥へ案内するらしい氣配を示す。その手に従つて曲り曲つて數十歩運んだ所の深々としたクツシヨンに、身を落ちつけると、灯が點る。はつと、預を見合せば艶然と笑つて立つてゐるそのサーピス・ガールは何んぞ私が先刻すり紳士君に注意された、例のモガなのである。私は全く呆然としてしまつた。

それから以後は私には、はしたなき四圓貳十六錢の盜難を忘れさす程の歡待ぶりだ。然しこの歡待にもや、倦怠を感じた頃、何



石の中から

平 井 蒼 太

ギプスの中の世界

晝はひれもす夜はよもすがら、僕は僕の第二の皮膚の中に寝て暮してゐる。脊髄カリエスの診断を受け、石を彫つたやうに固く冷め度いギプスの中に寝て、もう半年は経つて終つた。ギプスは最初大變滑稽なものに思はれ、其中に寝ることが氣恥しくさえ感ぜられた。

が私をかうさせたかを、彼女に聞いて見たのである。

すると彼女は朗らかな齒並を見せて答へた。「この不景氣で、とても客足がうすいものですから、宣傳部長の發案で陰陽師の虎公と言ふあのすり紳士を、東京から引張つて来て、あたし逢を囿の、一寸したインチキなんです。お蔭で此頃は不景氣しらずですわ」その苦である。お金は先に取つておくんだから。歸途タクシーの運轉手、嘲笑的に「旦那もつと凄いい所へ案内致しませうか」と誘惑を試みて来たが、まだこの上を行く所があるんだから、街の段々大きくなつて來

るに違ひない。「もう之位で御免だよ」とタクシーに別れを告げ、終電車にゆつくり落ちついて、今迄の夢のやうな出來事を頭の中で反芻して見て、如何にインチキ時代とはいへ何んと凄いかフエーのあることよと、感服してしまつたが、小暗い所で所謂、男、ホイイに牛太郎されるよりも、このカフエーの遊客誘引策の方がいくらか氣が利いてゐるかに判らないとも思ふのである。終りに世の若人に告げる。

アスファルトですれちがつた女には、決して輕率な一べつ戀愛を感じてはならない。

併し今では、其無神経な冷めたい肌を揉めることは、恰も僕自身の肌を愛撫する愛着を覺える。こんな石つころに過ぎない不細工なものが、僕の病氣の進行を防いでゐて呉れるのかと考へると、半夜寝ながら泌々愛撫して、感謝の念に胸が重くなる時が多い。柔い重れ布團の觸感を思ふことはあるが、このギプスを負ふてゐなければならぬ宿命が、直ぐそ

れを打消して呉れる。やがて徐々に恢復期に向へば、このギプスもいとほしいものになつて來ることであらうが、そして伸々とした自由な空間を戀するに至るのではあらうが。僕はギプスの中で考へるのである。川柳も矢張りこゝした進展の道を踏み、川柳もこゝした経路を辿るのではないかと。今の僕は恰度與へられた川柳と云ふ姿を、何か滑稽な

ものに見、自分の考へる姿への歪曲を試みてゐるのではないか。併しやがて、有のまゝの川柳が、完全に自分の魂の觸手となり切ることを疑はずにお度い。そして僕の病氣の恢復を信ずると同様に、未知の世界人の川柳の生成が来るものと信じてゐ度い。

見世物女相撲

都會ではもう滅多に見られない女相撲の一行が、次の宿で興行されてゐる。廢れ行く見世物へ強い就着を抱いてゐる僕は、病軀を押し見物に出掛た。十二三人の女力士が、寒い冬空に押されながらも、商賣ならこそ、裸稼業の演戯を續けるのであつた。三四十人の見物人が聲援を時々掛けるのも、田舎ならこそその化しい思を抱かされる。

省二・摩耶火雨先生にお伺ひ仕度い。淺學

新誌友

(七年二月十八日まで)

「川柳雜誌」半年分、金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を勧誘下さる様御願申します。御紹介される方には、「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますから、お申込み下さい。(線雨)

田村西英子、黒川龜、森進(荒井英賀夫)、米本貴志子、西山幸子(麻生路郎)、増井龍一(永田里十九)、幸松四五磨(松盛琴人)、藤田道太郎(長崎柳秀)、藤原誠一郎(福田鶴峰)、伊藤常二、栢本謹三(米國)神谷正司、辻眞一、

の僕未だ女相撲の古句の一句にすら出會つたことがない。若し御教示を得ばこの上もない大幸である。

江戸期見世物女相撲は、既に延享二年の流言記にも見え、延享三年の俳諧時津風にも「男より勝色ありや女郎花」なる句があり、明和年間には最も盛んに興行され、寛政版の黄表紙にはその趣向を取入れたものさえあり、江戸期見世物界にあつては重要な位置を占めるものであるから、當時の川柳人の對象として取扱はれた答であらうが、僕其一句をす知らぬのは、全く不勉強の致す處と恥てる次第である。

夕暮の街道を、番附と繪ピラを抱いてとほ考へる力すらない僕の悲惨さをナンセンスと嗤ふ常識を嗤ふ僕だ。

森立名、高見柳骨、小林亂雨、山本佐一郎、北澤製装雄、新開松喜、奥村伊三郎、野由櫻、青野紅雨、長崎柳秀、吉本末吉、谷口水人、塚本掉二、黒田顯尚、荒井英夫、岸上錦石、金井有爲郎、後川中孝三、二宮權太郎、豊田實、越中今雨、田中孝三、寺村逸村、小島草村(本社事務所) 括弧内は紹介者

轉居

▽麻生路郎(大阪市西成區玉出本通三ノ三町六)▽水谷鮎美(大阪市西淀川區大和田町六三)▽中西おま(大阪市住吉區駒川町八丁目二竹内方)▽朝田新水(大阪府北河内郡三郷村西橋波五六九ノ二に改稱されました)

友情に泣く

悲境に落入つて始めて知る友の情の厚さだ。廢人と同様な僕を鞭撻して、收入の道を講じて呉れるのも、所有機會に僕を世間へ出さうとして呉れるのも、皆んな情けのこもつた友の手だ。よく泣きたい蒼太も、もう涙も出ない人の世の暖かきだ。

且て僕は「恩情に泣く子となりしあざざらん」と、勤務先の規定に依る恩恵に對して、反逆の兒の姿を残してゐる。併し今となつては充ては無い。階級の思惟はもう働かすことも出来ない廢人だ。こうなつた身では、そんなことは皆ひがみ根性として納つて置かれはならぬ。

肉親の愛と愛慾の情を知つた僕は、更に友の情を知る身となつた。何んと云ふ朗かな人の世の幸福であらう。一六・一一・二九

正誤

献立を話してばかりうまからせ 民 郎
愛人のまつ毛ははつきりして涙 緑之助

新刊柳誌(二)

▽「青泥」(菊版)大連市久方町、大連川柳社
▽「川柳うきよ」(四六版)東京市芝區宇田川町二〇川柳うきよ吟社▽「浮舟」(菊版)吳市北迫町二五ノ一、浮舟川柳社▽「天津」(四六版)天津日本租界曙街、天津川柳會▽「かむる」(菊版)函館市青柳町五〇函館川柳社▽「三味線草」(謄寫版刷)大阪市此花區西九條上通二ノ六二大阪嬢柳川柳會



川柳塔

素琴山・緑合議選

松盛琴人

病友へ

病んでゐるに聞けば冷たい風が泌み
變り者同志の下駄がちびてゐる
林檎つやくとあり彼氏は小康
手のひゞを見せる牧師へ跪き
不確しかな事へもたよる氣の弱さ
感情の芯をちくりとさす言葉
春風やいよく母に似る娘
金口を買うてカフェに足を向け
要領をつまんで話し驛へつき

同志會鹿兒島辯が突如立ち
親切へ荷物のやうに酔ひつづれ

○ 安井ひろし

昭和六年二月就職五ヶ月

御意のまゝ仰せのまゝの宮仕へ

シランホのT氏

バスでわざと阪急のランチ

一九三二年二月廿八日欣女の靈に

「はるかの希望」を捧ぐ

OHーやつぱり愛して居たのだ

昭和七年十一月三十日母の夜伽に

禮受けの襟元風の冷たく

一九三二年二月七日照に會ふ

片戀十五年今宵酔ひしれぬ

○ 伊藤愚陀

嫁ぐ話か風がころころ

ひこりほつちで闇の調味を貪りぬ

着物の點景に男ひよるながし

廣い窓縁で娘の腕が物語る

○ 岩崎柳路

寒穉 古巡查は別な氣で起る

初午の太鼓を叩く子は達者

急病に博士迎へるバツカード

寶惠籠の聲が揃つた小半丁

○ 朝田 新水

いづくにもなく酔きれの春は逃く

そのまゝの姿に猿の背が伸びず

結婚を急ぐ白粉瓶の數

◇ 中野 裸人

キハツ油をにほはせてるいゝ天氣

利にならぬ借家へ白髪ふへるのみ

泣きごきを書くにインキの色うすし

見習は煙管のさきで使はれる

活辯のまねが隣の娘にきこへ

節分

お化に結へし四十男にすゝめられ

◇ 須崎 豆秋

晝食の部屋ヘラデオが暴れ込み

薄情を聖天様へ告げに行く

鹿ヒヨイミ荷車挽の牛をよけ

◇ 西村 明珠

綿毛布子供すやく寝てくれる

信心に凝るなきついで目になるぞ妻

頼まれて若さの足で駈けて行く

借りものゝ様に子供等寝てしまひ

進歩するはやさの中で目が廻はる

明日誠になる身がたくホツチキス

◇ 水谷 鮎美

殻をやぶれば陽はあがりきり

おそろしい夢からさめて子を抱きぬ

泣けてくる下女にひかつたもめん針

トラックで見る 國道のいゝ景色

木型洗うて壽司をこさへる

◇ 日野 華水

快速度後は野さなれ山さなれ

乳房へも母になる身のカレンター

社長室床の埃へ陽があたり

日曜の父へ襖が破れてる

◇ 中見 光路

青白き風突き切りつ 店奉公
暫らくは無なり落葉をかき集め

いつの間か老人級に坐らされ
さり合はぬ顔で時計は刻むなり

◇ 田中都之介

理想に近き人絹を着る

吾が胸にサイコロ振つて夜を出る

研ぎ上げた鑿の寒さに襲はれる

露を持つ 唼佛の灯が寫る

◇ 吉田水車

罪惡のやうにカフエー暗くゐる

斷髪は由井正雪云ふもあり

ほんごうの顔で女給の晝をゐる

背の高い方が電氣を點けに立ち

大阪のこゝの芒の黒いこみ

◇ 喜多春秋

處女の足電氣炬燵は彼でなし

奉公にやるこいはれて寝た子かな

カーテンに潜むものある夜の雨

借りだらけ今藥湯に沈んでる

◇ 岩垣奇可愛

耳かきを妻に持たせて横を向く

碁石くすす父の笑ひを次で聞く

六枚綴戸籍は父の歴史なり

◇ 茨木奈緒美

大阪の埃の足袋をはたくなり

アパートの晝を女の寝込んでる

大阪の動きのなかに投げこまれ

◇ 西田艸樂

車から脱ける大根を差してやり

請求書大きく見えて渡される

藥屋は蝦の殻まで残し置き

◇ 岡崎桂枝

まんざいの笑可しさ妻に脊を打たれ

親しさは炬燵から出すカヤク飯

ひしやけた朝日ミ印を掴み出し

◇ 中澤濁水

反古籠を探し番地をつぎ合せ

里歸り待つ間流しに萎む葱

焼き増しをねだる妹よく寫り

◇ 上野錦水

警官へ警戒を表す程に酔ひ

子守唄止んで添寝の腕が延び

言譯の甘い女房で借りが殖え
新妻の歩む姿はスポーツ型

◇ 妹尾 變人

一匙の鹽にも教へらるゝ世よ
儲けられぬ日をするめなきかぢり
儲けたらご云ふ空想に母の顔

◇ 伊藤 綠之助

猿廻し宿へ戻ればある女房
ドカ／＼訪問をして待たされる

◇ 平井 蒼太

憂鬱は雨のしぶきのやうに來る
日向ほつこの雀さわたし

◇ 生田 翠夢

プラタナス二月の空に刺つてる
雲の色政界に似たり二月かも
表情のその魅惑さに惚れてゐる

◇ 熊谷 紅

あの岡も掘り下けて居る住宅地
こくなつて仕舞うて二階借りあるき
寢臺がいびつに揺れる天下の嶮

◇ 福田 鶴峰

むづかしい角度でミゆの水は落ち
がつてんがいかぬ女に叩頭され

粒々集

松山 前田 五健

つまらない事に商賣なら笑ふ
子の唄を覗けば馬さ兵が描け
正月の夜更けしみぐ冬の底
測候所ケナして御慶傘を借り
道場を出るさ寒さへ丸くなり

御影 長崎 柳秀

處女會の主事は五十さ有餘才
節約だ致しますわさ若夫婦
お正月思うた通り酔ひ潰れ
一巡りついで來た妓の座りやう
踏み切りの向ふは馬さ並ばされ
床柱兩手に花さいゝ機嫌

大阪 長谷川 一徹

解禁の再禁止のさ猛々し
師を訪へば食事半ばに出で給ふ
背景にすがる安易さ云はず居る
髭のあるレビウガールの顔顔顔



柳

の

絮

長 野 吉 高

(一一)

難多な道具の散亂した××座の樂屋は、ユーゴーが讚美した舞臺のやうな莊嚴も嚴肅も無い。其のあけすけな亂雜の中に、火鉢を挟んで劇作家の八福君と雨軒居士とが話をしてゐる。八福君は、一見するに猫庵君を想はせる程の瘦身長驅だが、禿だけはまだ巢喰ひかけてはゐない。少し赤ちやけた頭髪を奇麗に分けて、顴骨の出た蒼黒い顔を時々擧めては氣六ヶ敷さうな皺を造つたり崩したりしてゐる。

四、五間離れて、茂里榮ちやんを中心にして花が開いたやうに女優が三人座つてゐる。切れ長の眼の女優が舞臺表情そのまゝの顔をして

「お芝居ミキネマミ、ミちらがお好き？」
と訊く。

「ミちらもよ。あたしね、童話作家協會の「フェリー座」の會員たわ。見せて上げませうか——」

茂里榮ちやんは、黒つほいろクダ地に眞紅の虎斑の入つた上

衣の裏襟を一寸はねて、銀色の小さな櫻型のマークを見せる首の長い一人が横からのぞき込んで

「ま、いゝわね。」

茂里榮ちやんは快活に

「協會のアンダ先生から、あたしを會員に出来ないかつておつしやつたんですつて。だからなつたのよ。でも、つまんないわ。童話劇には一度も出た事ないんですもの。」

「怎うして？」

「だつて、お医者様ミマ、ミがいけないつて——あたし、病氣しちやつたから。だから、會員でも特別會員つて言ふのよ」
眉の濃い一人が同情顔を

「ま、お氣毒だつたわね。ミミがお悪くつて？」

茂里榮ちやんは急にペソを掻きさうな顔をして

「脚なのよ。」

突然、何に興じてか雨軒居士と八福君が爆笑する。女組の話は、これに一寸吹飛ばされた態で杜切れて了ふ。首の長い女優

が思出したやうに

「あちらの舞臺の方へ連れてつて上げませうか。」

「え、見せて頂戴。」

「ぢや、ご一緒にいらつしやい。」

茂里榮ちやんは悦んですぐ立上る。

「お綺麗なお嬢様だわね。」

「何んて可愛いんでせう。」

後れて立上つた二人の女優は、たたりふらりミ袂をゆりながら續いて樂屋から出て行く。

後の方が急にひつそりなつたので、振返つて見た雨軒居士

「何處かへ行つたかナ。あれは君、相當な女優かね。」

八福君は、ポケットからビスケットを摘み出してはポリ／＼

啣りながら

「あれが、ほら例の××座員の紛叫で遂に脱退した一部の女優だよ。今度この劇團が、僕の脚本を上演するに就て、臨時

應援をやつてくれる事になつてゐる。この劇團にはいゝ女優

がゐないもんだからね。今日は本読みがあるので、定時は來

て見るに集つてる者はあの三人だけなんだ。大体この劇團の

連中は、さいつもこいつもづぼらばかりだね。」

「ふん。」

「其れより、一つ困つた事には今度の劇には一匹犬が出るんだ。」

「犬が？」

「まさか張子の犬も出されないので本物を出す事にしてゐる

が、何しろ相手が畜生だ。こいつの手なづけには弱つてるよ」

「其んなものは出さなくてもいゝだらう。」

「ところが、この犬を出さないミ劇が成立しない。舞臺監督

が面倒がつて、逆も犬にまでは手が廻りかねる言ふから、

この役は僕が到々引受けたよ。俳優の一人が倅ひ白犬を飼つ

てるので、そいつを借る事にしてゐる。つまりこれで——」

八福君は又ビスケットを摘み出して

「犬の機嫌をさとりつゝ藝當を仕込むのだ。」

「まるで犬芝居ぢやないか。」

「考へて見てくれ給へ。こんな事まで作者がやる何の義務も

責任も無いんだからね。」

「勝手な苦勞だ。うつちやつさげばいゝではないか。」

「だつて君、折角の名作がこの劇團のあののんべんだらりな

舞臺監督まかせでは、不安で逆もじつこしてはゐられないよ」

雨軒居士は火鉢の縁をキユツ／＼撫で乍ら

「實際、日本の新劇團あたりは、まだ／＼内面から改良すべ

き點が大分あるやうだね。ドイツあたりは、大体に於て舞臺

稽古なきでも眞剣だよ。本読み、立稽古、本稽古、舞臺稽古

其れから初日前の試演等、皆それ／＼熱心なものだ。ホルク

ス、ビュエネあたりの本稽古は、舞臺で必要な大道具小道具

を嚴密に組み、朝の十一時頃から晩の五時頃まで、約二十日

程も續けるがね。舞臺稽古は、俳優は鬘をつけ假舞臺を外し

て新しいものを組み、初日と同じ意氣でやるが要するに日本

と違ふのは、稽古と雖も必ず舞臺を組み小道具を持つて正確

な實際の再演をやる事だらう。ラインハルトは、芝居は脚本よ

りも俳優だ、と言つてゐるがこれはいゝ俳優さいふ意味以外に十分に稽古を積む、さいふ意味だと思ふね。」

「同感だね。稽古の不十分な芝居にいゝものがあらう筈がない。ま、兎に角、稽古を見るにしても此處では甚だ不十分だと思ふが、其れさへ承知なら、舞臺監督が來たら相談して改めて稽古日を通知するよ。」

「碌でもない脚本だから上演が思ひやられるね。」

八福君は澁面作つて
「ご挨拶だナ。ま、その貞子さん——だつたかね。一度遊びかたゝゝ寄越して見給へ。何かの参考にはなるだらう。」

「頼むよ。」
この時、樂錢君がのそりこ這入つて來る。八福君は眼に角たて、

「皆んなは一体さうしたんだ！今何時だと思つてるんだ！」
樂錢君は兩軒居士に馬鹿町囃に叩頭するさ、のそりこ火鉢の側へ寄つて來る。

「僕ア別に用は無いでせう。芝居をするつて柄ぢやなし——」
「君には君の仕事がある筈だ。仕事をおつ放り出して遊び廻つてくれば困る。」

「あ、背景ですか。大丈夫、開演までには描き上げますよ。實は途中で思出してミミ子クンを見舞つたりしたので、其れで遅くなつちやつたんで——」

「病氣してるのかい。」
樂錢君はゴクリミ唾を呑込んで

「其れが、その——大怪我をしちやつたんです。アバートの

階段から落つこちまじしね。可愛想に左手を折つたんですがいや、あの時は大變な騒ぎでしたよ。」

兩軒居士は八福君に
「女優かね。」

「違ふ。貧乏華族の娘だ。女だてらに畫を描くのが不埒さあつて、家をおん出されてゐるんださうだよ。」

樂錢君はべら／＼と
「時代の二、三十年も向ふを歩かうつていふ恐ろしい尖端女畫家なんです。尤も高はかなり描きますがね。」

流石に唇を蹴られた事だけは言はない。八福君は時計を見て
「上演までには後十日しか無いんだ。呑氣なもの程があるなつちやるない。」

「誰もやつて來ませぬね。」

樂錢君は格別苦にもならないさいつた顔。兩軒居士は突つ放すやうに
「ま、上演料で我慢するんだね。」

八福君は手を振つて
「駄目々々。この劇團は今迄に僕の脚本を三つ程上演してゐるが、其の上演料を不足なしに寄越した事かないんだから洵に心細い。」

「君の脚本ぐらゐる何かさうさう、因縁のつくものは無いよ」
「僕が悪いんぢやない。先日も或劇團が無斷で僕の書いたものを上演してゐるさ聞いたので、文藝家協會へ問題を持込んでさつちめてやらうと思つて色々調査したところ、其の劇團つてのが哀れ憫然たるものでね。一寸失望はしたが、然し今後のこらしめの爲めと思つて談じ込んでやるさ、平身低頭し

て謝つて揚句上演料は出すには出したよ。」

「臨時収入つて譯だナ。」

「其れが君、算盤を弾いて見るにたつた三圓四十八錢にしきやならないんだ。これには僕は啞然としたよ。君三圓四十八錢也の上演料なんて——」

八福君は笑ふにも笑はれないさいつた顔をする。

「結構ぢやないか。三文の價値も無い脚本ばかり書く君にしては分相應だ。」

八福君は口惜しがつて

「だがね、君の例のハーゲマンの「舞臺藝術」の翻譯は、誤譯迷譯すつほ抜かしが多いつて甚だ不評判だが、僕はごに惡口はされない。誤譯はやらないからね。」

「本が賣れないので、出版元は弱つてゐるさうだよ。」

兩軒居士は、けろりとして人事のやうに言ふ。樂錢君は軽く

「あ、あれですか。一向に面白くないぢやありませんか。」

兩軒居士は言下に應酬して

「當り前だ。小説之間違へてくれれば困る。」

八福君はすかさず

「昔から、小説だつて君の書くものは妙に面白くない。」

「僕自身でも左様に思つてゐる。君は脚本ばかり書いてゐるが、怎うだね、まだ糞や小便の事を書いたものは無からう」

「巫山戯ちやいけない。僕は肥料屋ぢやない。」

「正岡子規は、馬糞に強い俳味を感じてゐたさうだがね。ミにかく、糞だの小便だの屁だのつて、こんな汚ならしいものを扱つた文學は何處の國にだつてさうザラには無い。」

樂錢君は小首をひねつて

「誰かの川柳に「ため息を尻からついで吐られろ」つてのがあります。これは屁の事でせうね。」

「屁にしる糞にしる、こんな不快なものにでも俳味や柳味を感じるのには日本人獨特で有難い事だが、然し餘り自慢は出来ない。何故ならドイツ文學にも糞や屁の事をあしらつたものがあるからね。」

「はアン。」

「だが、糞文學では日本やドイツはまだ問題とするに足るものが無い。其處で最も痛快なやつは無いか色々研究してみろ、有つたよ、世界中でたつた一つ有つたよ。」

八福君は苦笑して

「馬鹿くしい。碌な事は言はない。糞の事なんか怎うだつていゝぢやないか。」

「ま、聞き給へ。フアブルの例の「昆蟲記」には羊の糞や馬の糞を喰つたり、其れをまるめて其の中に卵を産んだりする虫の事が精細に科學的に研究されてゐる。君達はこの事を大變に珍しがらう。ミころが、驚く事には既に古代ギリシヤのアリストファネスは、この糞喰ひ蟲を題材にして「平和」さいふ一篇の戯曲を書いてゐるがね。」

樂錢君は眼をバチつかせて

「へん。」

「當時の哲學者ソクラテスを嘲笑した「雲」さいふのや悲劇作家のエウリピデスを諷刺した「蛙」等、アリストファネスの書いたものは總べて骨を刺すやうな辛辣なものばかりだがこの「平和」さいふのは餘程毛色が變つてゐるよ。——或平和論者が、自分の家の厩に馬のやうに繫いで人間や驢馬や其の他色々の糞を喰はして飼つてゐる一匹の巨大な蟲に乗つて昇

天する事になる、するミ娘が、蟲んかに乗るよりも天馬にでも乗る方がいい、ミ勤めるが平和論者は、天馬だミ俺ミ二分の食糧が入用だが此の蟲なら俺一人分で済む、何々なら俺の糞を喰はして置けばいいんだから——ミ、いふやうな至極人を喰つた突飛な喜劇だがね。」

「なるほぎ。」

「其の當時のアテン人は、大道の何處へでも無遠慮に糞をする風習があつて、この糞を除ける爲めに糞掻き人夫がゐるて糞を掻き集めてゐた。」

「ちえ、汚ない！」

「要するにだね。アリストアネスが糞の事を書き、糞喰ひ蟲の事を取入れたのは、あながちに彼の空想からのみ出たのではなく、其處には相當の根據があるミ見なければならぬがでは彼がモデルにした蟲は果して何んなものであつたか、ミいふ事は今日のミころ正確には判らないよ。多分カンタロスミ呼ぶ一種の黄金蟲だつたらうミいふ事にはなつてゐるが、然らばこの蟲が何んなものか、又は糞を喰ふ蟲類の中の凡そぎの類に同じい、かミいふやうな事は全然不明だがね。フアブルの昆蟲記にも此の蟲の事は書いてない。で、この戯曲を讀んで此の糞喰ひ蟲に興味を持つ程の者は、大抵こゝで行詰つて了ふ。」

「はア、はア。」

「餘蘊なく糞の描寫をしてゐる點では、恐らくアリストフアネスの右に出る者は無からう。實に、喜劇作家としては偉大なもんだ。この事はね、僕が××誌に書いた「アテン人ミ糞」に述べてゐる。詳しい事は其れを見てくれ給へ。」

樂錢君は恐縮して

「いえ、もうよく解りました。」

「糞を團子のやうに丸めて、其れを火であぶつて、其れから。」

流石の八福君も呆れ返つて

「何んだい。黙つて聞いてりや。くだらない事ばかり言つて。」

「だつて君、これは遠い昔のギリシヤの話だよ。」

「くそ面白くもない。いゝ加減にし給へ。」

雨軒居士は意地張つて

「さうだ。今の劇作家で糞の事を書くやうな糞度胸のある者は無からう。君が一つ、糞を主材にして書くんだね。」

樂錢君はぬからず

「さしづめ人糞肥料宣傳劇、ミでもやりますかね。」

「さうだナ。糞作家に糞劇團か、これぢや觀客も鼻持がなるまいて——」

到々糞攻めに逢はされた八福君、苦り切つて

「ちえッ！僕は冗談ミころぢやないんだ。」

雨軒居士はフツト何かを思出したミ見えて遽かに懐を探り始める。

「はて？」

八福君は早口で

「何うしたんだ！金入れでも落したのか！」

「金を落したのならまだいいんだが——これは大變な事をしてつた。確かに懐へ入れたミ思ふんだが——はて？」

「一体、何んですか？」

樂錢君の言葉に耳も貸さず、稍々狼狽氣味にすつミ立上つた雨軒居士

「神田へまた引返さねばならない。弱つたナ——茂里榮は何處へ行つたんだらう。」

たゞならぬ氣配に續いて立上つた八福君

「あ、舞臺の方ぢやないかね。女優ミ遊んでるんだらう。」

雨軒居士は樂屋口から姿を消して大きな聲で叫ぶ。

「茂里榮！茂里榮はゐないか！茂里榮！」

(つゞく)



一路集

(募集句)

表情

川村花菱選

表情も交へて話す旅戻り 憲坊
 淋しい顔すれば淋しい鏡なる 比呂詩
 表情をかすめる冬の蚊が一つ 雨町
 表情を忘るストッキングを直し 有爲郎
 繼母へ子の表情が突き當り 銀雪
 マネキンの表情へ立つ母と娘と 鳳石
 表情もまねて子供の立廻り 英賀夫
 表情もなく人生の裏に生き 八歩
 引下る顔に納得出来ぬ色 しさし
 急停車窓へ同じ顔がゆく 木公
 驚いた表情で来る火事見舞 青兒
 痛かつた話は無でゝ語られる 一笑
 吸ひつけて請求人の無表情 鴉天
 怒つた顔がすぐ笑へるので課長 勝二

表情へ父の怖はさも見せておき 鐘生
 むつかしい顔は火鉢はほこかれ 掉二
 顔色を見る子を父はさびしがり 同
 孤兒院の子の表情に誰がした 銀雪
 明らかな表情でゐる低脳兒 同
 表情を忘れて心齋橋を行き 水車
 重役の表情もして給仕去に 同

佳作
 表情の奥に何やら尖るもの 千雨
 夜遊びを母は顔にも出さず待ち 憲坊

「表情」の選後に 花菱
 人の句を見る時、大勢の人々の数多い作句
 の中からたつた一つでも、自分を發見して共
 に喜びたいと思ふ。讀んで行く中に、くだら

續川柳家の戸籍調

▽ 係 山 雨 樓

(一)姓名 (二)雅號及別號 (三)出生地 (四)現住所 (五)生年月日 (六)職業又は勤務先 (七)好きな句 (八)自供の句 (九)川柳以外の趣味 (一〇)配偶者及子供の有無 (一一)以上のもの (一二)川柳に手を染めた年月

(302)

吉田 綠 朗

(一)吉田寛一 (二)綠朗別號草枕 (三)岡山縣倉敷市濱田町五百二十一番地 (四)京都市中京區富小路通錦小路上ル高宮町五百八十番地 (五)明治三十八年十月三十一日 (六)吳服商 (七)咳一つ聞えぬ中を天皇旗、劍花坊。駕かきの息が揃ふと眠くなり、五葉 (八)可からずなれば境内好い日和 (九)あらゆる物の蒐集 (一〇)配偶者有、子無 (一一)閑。遼約。川魚 (一二)大正九年一月頃

(303)

熊 谷 紅

(一)熊谷勘一 (二)紅 (三)山口縣岩國町 (四)大阪府西區新町南通五丁目 (五)明治十六年十一月一日 (六)塗料問屋岸上商店 (七)晝寢から海岸線がのびてゆく、路郎師。松むしへまだ飛石がびつくなり、かほる (八)處女作隣から隣へ廻す行司札。木像は何んにも知らず拜まれる (九)旅行 (一〇)妻あり男兒一人

(304)

金 泉 萬 樂

(一)金泉光三郎 (二)萬樂 (三)大阪府東區

ない句に接すると、淋しくなる。見方は好いが表現が不足して居るものに對しては残念な心持がする。一はしの川柳家のやうな態度をしてゐながら、實に取るに足らない淺薄な作品を平氣で發表して来るものには癪にさわる。字も下手であり、表現もなつて居ないが、川柳家としての素質を見出すものに頼もしさを感じて来る。その中に珠玉とも云ふべき一句に接する時、私は自ら頭の下がるのを覚え、そこに云ふべからざる喜びを感じるので、たま／＼その人の句数が少ない時など、何故もつと作つて見せてくれなかつたかと思ふ事さへある。

川柳は、云ふまでもなく傳統久しきに渡る文藝であつて、云ふ所の新興文藝ではない。勿論時代と共に題材も視方も變つて行くには相違ないが、藝術家としての態度がさうぐら／＼と變つてたまるものではない。川柳は

洋室

◇ 柳路 選

油繪の父へ暖爐の火がほてり 三碧
來客がある 洋室の高笑ひ 平和亭
ソフワーにほんゝ居る目見得き 靈壺
洋室に案内されて足の位置 練屋丁

決してデマではない。説明ではない。要は、七字の中に深い人生が表現され、自己の中に他を見出し、他の中に自己を見出すところの境地こそ尤も重要なものである。

○家にかま云へば昨日の手を合はせ

もし表情と云ふ題に 此の句があつたとしたら、何人もびつくりして天位に推す事にならぬ筈はないと思ふ。

○腹立つふりも戀のはたらき
と云ふのも同様の思ひがする。私はたつた二つの此の句を見て、投句者諸君の反省と自重をうながしたい。

○何喰はぬ顔で男にけつまづき

○云ひこめられてうごく唇

○たけくらべ手をやはらかに下けて居る
思ひ出せば、いゝ句はいくらでもある。表情と云ふ事を、只顔つきにのみ限つて考へた所に、すでに諸君のまけがある。

岩島 柳路 共選

中見 光路

洋室に娘は 日本詰で居る 柳仙
洋室へ服に着かへる間を待たし 失知子
洋室に來た蠅の目のままりごこ 玄絃堂
洋室で陳情立つた儘で待ち 銀雪
洋室を出て冷やりさ風をうけ 四五磨

(四) 尼崎市西本町北通二丁目五八 (五) 明治廿二年八月廿二日 (六) 大阪株式取引所 (七) どの時計見ても出勤近くなり、水府。差向ひでは言へぬこと穴かし、路郎 (八) 満員の中で時々親を呼び (九) 歌舞音曲、生花 (一〇) 妻あり女兒二人あり (一一) おべんちやら、
(一二) 昭和三年三月

(38)

英木 奈緒美

(一) 英木孝二郎 (二) 奈緒美又は弘二 (三) 市内西淀川區浦江北一丁目 (四) 府下豊能郡藤田村刀根山病院内 (五) 明治四十四年一月三十日 (六) 無職 (七) たらしなきにいづそ死なうかたれとしの、路郎。さみしと云ひて帽子をきる子よ、山雨樓。片頬にばかり接吻されてゐる、鮎美 (八) 五位鷹の一撃鬨をさぐりゆく。桐の葉が落ちて雀がとびたちぬ (九) 讀書病前には登山 (今でも好きですが、出來ません) (一〇) なし (一一) 一体にブル人 (英雄主義) 食物では、白ねぎ、こんぼう (一二) 昭和四年秋から

(38)

内野 桃水

(一) 内野義則 (二) 桃水、萬里野一策、としを (三) 長崎縣新松浦郡星鹿 (四) 神戸市西區小河通二丁目 (五) 明治廿二年十二月十四日 (六) 溟人生活久し (七) 路郎氏の「同志の肩に月がよるめく」半文錢氏「又來たか名のみの春の畜生め」紋太氏「長命の相ある男庭を掃き」 (八) 明日を喰ふ圖案の膝とも知らず (九) 戯作、俳句、義太夫、それから大低のもの (一〇) 妻あり子あり (一一) 自己を偽る (一二) 昭和五年一月より

洋室の此處が搾取の策源地 艸樂
 空腹で来たのに寒い西洋間 明珠
 洋室の百燭光の眼に泌みる 柳人
 洋室の窓へはつきり灯が映り 水玉
 洋室に病んでがらんごした書間 線娘
 洋室もあつて新宅出来上り 吐句坊
 温室の様に洋間に陽が當り 耕民
 洋室へ歸朝以來の居を移し 千雨
 洋室へちみ不調和な五ツ紋 菊路
 ソファアの戀を凝視して居る裸像 沐天
 洋室へ寒暖計はよく昇り 一笑
 ゴム靴にリノリウムの滑る事 虛白
 洋室の一つも欲しい暮しなり 憲坊
 洋室にカラー氣にシヤンデリヤ 英賀夫
 洋室に目立つ原書のみまだ新 鯉友
 洋室の今日明かしく新官舎 水車
 凋落の跡洋室の悲惨なる いわを
 スチームがあり洋室の福壽草 没食子
 洋室で離れて暮す若夫婦 水人
 洋室のラヂオ矢つ張り浪花節 紅
 洋室の中に三つ四つ日本趣味 雨町
 洋室の三時もの皆影があり 秀樹

佳吟

おつゝこ通る洋室寒い事 水車
 洋室の窓訪れし寒椿 いわを
 洋室へ或日うぎんの湯氣が立ち 没食子
 洋室のバンゴ紅茶に陽が笑ひ 水人
 落籍れてさて洋室の落つけず 紅
 洋室の窓へコスモス咲きかゝり 狂水
 母一人此の洋室になじめれず 雨町
 一間丈け洋室にしたい設計圖 機見女
 洋室の間借りに鍵の多過ぎる 素月
 洋室の隅にスキーの立てかゝり 秀樹
 洋室へ来て其の柄も派出でなし 勝二
 ソファアに女中はさご掛て見る 耕朗
 ソファアの向うに煙だけが立ち 同人
 人位

洋室へ母はスリツバはいて居す 方眠
 地 位
 代表の眼に贅澤な椅子ばかり 利生
 天 位
 洋室に鳴る鳩時計唯も居す 富美三
 軸 吟
 洋室でフラッシュューを焚く笑い聲 柳路
 もう決めた語洋室お茶を替へ 同
 共選に就て

滿蒙旅行中の私へ久し振りに本社から選



町之西
MEMO
雨 緑

▼本誌二月號は新年號に劣らぬ好評であ
 りましたので勇氣百倍して居ます。
 ▼主筆路郎先生は病氣靜養されて居ます
 が決して重態ではありませんから御心
 配は要りません。しかし日本柳壇のた
 めにも、我社のためにも一日も早く全
 快されんことを祈つて居ます。
 ▼神戸支部新年句會席上でのいきさつに
 ついては席上、清公子、紋太兩君の謝
 罪で片づいたものと思つて居ましたが
 何處までも惡辣な陰謀家揃ひに見えて
 爭議團めいたしかも偽りの聲明書さや
 らを發表したり他社に惡宣傳をさせた
 りして極力自己の非を覆はんごされて
 居ます。川柳家にあんな人達があつた
 のかと思ふご遺憾に堪えません。
 ▼鶴町支部は愈々白熱化し新進社友妹尾
 變人君が關本雅幽君ご支部の幹事を更
 迭されました、今後の活躍を期待して
 居ます。
 ▼小松支部の上野錦水君から四月十二日
 より六月五日まで金澤市主催で産業ご
 觀光の大博覽會があるから本社の人々
 に是非來遊されるやうにこの通信が來
 て居ます。社の方でも川柳行脚を望ん

を命ぜられました。去る一月十日故郷の十日戎等で満洲では思ひもよらぬ事ホームンツクナ夜でした。

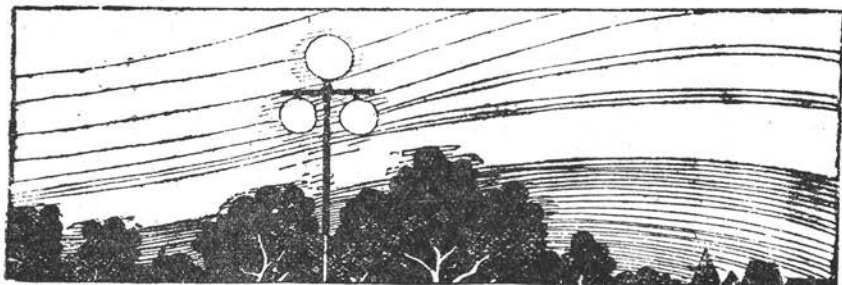
何回もくゝ入念に選をしました。光路君と共選なるが爲め少々ハンを入れば佳吟として頂き度い句があり乍ら其れを許されないう共選なので折角の投句者に對し遺憾に思ひます。

◇ 光路選

洋室のつもり覺へ椅子を置き 苦茶坊
洋室の一つは欲しい構へなり えいを
洋室で無沙汰の詫が座りこみ 憲坊
先代の遺産洋室ははなりぬ いわを
洋室へくだらぬ趣味を貼り廻し 紡線娘
洋室にマダムミマダム春四月 三絃堂
金口を置いて洋室人を待ち 錦石
洋室があるばかりに空家なり 同
洋室の見合ひ紅茶の角砂糖 水人
洋室よプロの味方になぜなれぬ 柳人
洋室へ着てその柄も派手でなし 勝二
洋室のこゝが搾取の策源地 艸樂
洋室に遠く隠居所建てゝあり 明珠
一間だけ洋室にしたい設計圖 機見女

秋深くして洋室の主は病み 三碧
洋室へシヨバンの夜曲流れ来る 富美三
洋室で母はきよごんご待たさる 紅
洋室へ或日うぎんの湯氣が立ち 没食子
洋室に社長の欠伸聞えて來 英賀夫
洋室に浮世を避けた葉巻にて 沐天
洋室の埃を浴びて裸像立ち 雨町
洋室でなくてよろしい 割烹服 靈壺
洋室をのぞいて欲しい皿があり 同
洋室のその雰圍氣に二人きり 秀樹
佳句
洋室の笑聲絶えず落椿 秀樹
落籍されてさて洋室の落つけず 紅
洋室へ手の置きどころを這入り 靈壺
ピアノこもつて洋室の冬 錦石
ソツファの向ふに煙だけが立ち 耜朗
人
洋室は彼ご彼女の趣味に出來 雨町
地
空腹で來たのに寒い西洋間 明珠
天
落着けぬ心洋室明る過ぎ 秀樹
軸吟
有あまり飾る洋間もうら寂し 光叫

ではるますがまだ確實的でありません
松下小柳十君が今回社友として入社されま
した。今後活躍を望みます
今回左記の諸氏を客員に推薦いたしました
福島縣白河(鳥山一步(大阪)、尙相元
紋太氏は社規により客員名簿から抜く
ここにいたしました。
▼社友西田艸樂君が幹事の川柳紳々會は
久しぶりで道頓堀二ツ井半松藥局で開
かれましたが本社側からはかほる君だ
け出席されました。
▼同人岩崎柳路君(撫順)から滿蒙視察に
來る様に本社同人社友に云つて來て居
ますが誰か出掛ける人はありませんか
番傘川柳社では大阪三越で二月十四日
から六日間川柳趣味展覧會を開催され
ました。
▼大西八歩君は松江支部の都乙介、柳人、
天痴人、光三の諸君笹川支部の縁之助
君に逢つて親しく語られたそうです
道田葉牛君令嬢不二さんは肺炎で病臥
されてるそうです。一日も早く全快さ
れんことを祈ります。
▼私は盲腸炎で二月五日から十七日まで
自宅で療養して居ました。阪大の長崎
柳秀博士井上湧三博士に御厄介になり
殆んご全快いたしました。柳友諸君か
ら多數の御見舞状を頂きましたことを
厚くお禮申し上げます。
▼本號の編輯は路郎先生が評養中なので
琴人、山雨樓、丹路、愚陀、鶴峰の諸
君ご私事で致しました。



川柳
幽明無線電話 拾遺 (一)

秋 農 屋

● 秋 農 屋
青 陽 舍 柳

○モシノ、片山君かえ。●ア、梅本君だねまた何か話す事が有るのか。○曩には七世川柳の隠退一件から、八世以下の川柳號繼承に就いての事情を話したが、數世の川柳の身分や、實生活の事に就いては、少しも觸れなかつた故、夫れを君から聞かうと思つて、再び呼出した次第だ。大概の事は私も知つてゐるが、詳かに記憶しない事もあるから、君の知つてゐる事を話して貰ひたい。●君は亡者や現在人に對して、悪口や樂屋落を云つた而已でなく、他の秘密までも暴露したので、少し耳の痛い者も有るやうだから、あゝいふ事は慎んだ方が宜しからう。○御注告は有難く聞いて置くよ。七世川柳は、本名を廣島久七云ひ、淺草吉野町で煙草屋をして居たね。●元來あの人は、舊派の甘海門の俳諧師で、得蕪、燕壤、滿禾齋、風也坊なきゝ號したが、六世川柳の姪さかを入れて、妻女とした縁に因つて、六世の歿後、七世に推薦されたのである。○温和の性質で、風采も立派であつたが俗物ばかりの柳風社中では、厚遇しない人も有つた。夫れは七世が、詔諛さいふ事を好まぬ故であつた。一人の息子があり、一福ミ號して作句もした。●大過堂真中に強要され、隠退の後柳翁ミ號して、明治廿四年九月に歿したが、其後に一福は、悪友の爲にある事に連坐し、遂に圍圍の人のさなり、夫れ故に閉店して他に移り、煙草の仲買をして居た。○七世も商業には疎かつたやうである。●あの人は「戸締りを頼むぞ我は先へ寝る」といふ、辭世の

句を遺されたが、此れは息子の前途を懸念して咏んだものだ。當時の人々は噂をした。○八世は、本名を見玉環といひ、士族であつたが、舊幕府の御家人であつたらしい。明治維新の後に官吏になつて青森縣に赴仕した。元祖の眞蹟錦木塚燭文の色紙は、彼の地で發見して、手に入れたものである。數年の後、職を退いて東京に歸り、上野動物園の後の、谷中清水町の華族大河内家の、舊長屋を借り、老妻と二人で住んで居た。●是れといふ職業もないので、困窮してゐたところ、親友眞中の後援で八世川柳に選舉され、些少の狂句點料を得て、それを米鹽に代へたのであるが、生活に不充分であつた故、秘藏の錦木塚の色紙を、代金十圓で、昇旭に賣却したのである。○夫れより後、いよく窮乏を告るので、社中の有志者が協議して、頼母子講を催し、漸くに其急を救ひなごした。●此人が病歿した時には嗣子も無く、力に頼む親戚も無いので、甚寂しく葬送したので○私が前に淺草の菩提所へ葬送した、と云つたのは、記憶の誤りであつて、小石川茗荷谷町の林泉寺であつた。●明治以後の川柳の中では、八世が一番學者であつたけれども、自作の句は理窟勝のものが多くて、一向に面白くなかつた。○前にいひ漏したが、八世の前號は、括囊舍柳袋といつたのである。●何としまも八世の晩年は、實に悲慘であつた。○九世川柳は、前島氏で、日本橋楓川岸の附近で出生したと云ふから、大方町人の子であらう。幼名は不明であるが、和橋といふ號を、後に本名とした。狂句の號を、萬治樓義星、後に義母子の文字に改めた

●是等の名も號も、總て日本橋に因んだのである。○青年時代の職業は不明であるが、癡書といふものを善くした故、金平糖を入れる桐の箱に書を描いて、夫れを職業としたものであらう。明治の初年に新聞記者となり、「有喜世新聞」萬朝報等に筆を振り、晩年にはそれを罷めて、狂句専門になつた。●八世の歿後、臂張亭と太と大競争をして、九世川柳の椅子を贏ち得たが一方に太が自立して、正風亭九世川柳と名宣を擧げたので、我こそ正統の九世川柳なれと、自分の息子に家督相續させて、前島氏を嗣がせ、別に柄井家を再興して、姓を柄井と改めたのである。明治以後の川柳中で、此人が一等の上手であつた。○併し「柳風機關狂句之葉」「狂句柳の葉」「柳風狂句葉」等の雜誌を發行して、狂句を宣傳したのはよいが、屢々誤説や虚説を書いて流布したのは、此人の甚悪い一癖である。●夫れ而已でなく太の死後までも、俱不戴天の仇敵の如く、誹謗攻撃したのは大人氣ない所爲であると思ふ。○十世川柳は、本名を平井省三といひ、士族であつたらしいが、東京市吏となり、淺草區役所に長く勤務してゐた。狂句の初號を、北窓筆雁といつた。九世の歿後に、相續して十世と成つたのである。●當時の狂句作家中の、能書といはれたが、餘り句會に出席せず、偶々出席するに、傲然と構へて大言壯語するので、社中の人々から敬遠されてゐた。○十世となつて後は、多少態度を改めたと聞くが、私にはよく知らない。●小學校工事に就いて、收賄沙汰が起り、面白からぬ評判が立つた爲に、隠退を餘儀なくされ、昇旭が十一

關東川柳團を 迎ふに際し

歡迎の言葉

關西川柳家に

世を相續したので、自分は柳翁を號した。然るに大正六年五月十一世が病歿した爲に、再び還り咲して、主判者となつたが、其後、十二世川柳の號を、賣物に出したり、自作の句を變名にて句會に投じ、夫れを自選したり、不法行爲が續出した故、社中の人々から排斥されて、再び隱退したのである。○十一世川柳は、中村氏であつたが、徵兵を免かれる爲に、小林氏を冒し本名を笠三郎といひ、狂句の號を、開晴舎昇旭といひ、松樂堂齋鶴に師事して、初めて狂句を作つたのである。根津遊廓内の酒店の息子で、父の昇更を始めとして、弟達に至るまで狂句を作つた。明治の中葉、遊廓が洲崎辨天町へ移轉する時に、高崎屋(商號)酒店も共に同所へ移轉してより、營業が繁昌して、金廻りがよかつた故、諸方の狂句會の樂評者をなし、景物を多く奮發した爲に、忽に名を成したが、選句の卷に「拔卒」を「拔卒」

と書いたほぎであるから、其學問の程度は、大方察知される。併し少しも悪氣の無い、好々爺であつたのである。●妻女に死別した後、實の娘に婚を取り、自分は隱居して、洲崎遊廓内の老藝妓を入れて寵愛なし、それが爲に死期を速めたといふ噂があつた。此れには餘談もあるけれど、他の秘密を發く事となるから、何も云はぬ事にしやう。○碧流舎十三世川柳は、柄井亭十三世川柳は、健在の人であるから、世間でよく知つて居るであらう。イヤ亡者達を相手にして、下手の長談義をやり、人々に迷惑を懸けた、夫れでは此れで別れしやう。●君も今年は七十一で、近く冥土へ來るだらうから、其時は同志を糾合して、大歡迎會を開く事にしやう。○それならば今から、豫めお禮を述べておく、有難う。 (續く)

川柳明治に復興し大正昭和に至りて益々隆盛ならん。時に關東の柳人諸氏關西訪問團を組織して近く關西の風物に接するに共ニ柳交愈々濃やかならん事を期せらるゝに到る。これ柳壇空前の快舉にして我等關西柳人たるものひこしく欣慶措く能はざるに、茲に京阪神各社は京阪神川柳團の名を以つて協力之を迎えんとするにあたり聊か蕪言をつらねて歡迎の言葉となす。

京阪神川柳團

約四十名の關東川柳家諸氏が來る四月三日(大阪探勝、句蓮、歡迎宴、一泊)四日京都探勝都おざり見物)の兩日に亘つて關西の地に來遊されることになりました。斯る快舉は新興の柳壇にとつて全く劃期的な一事象でありますから之を迎えるものにとつて絶大の努力を拂ひ、今回の關西訪問をして、可及的に有意義ならしめんことを期したいと思ひます。就きましては關西に於ける川柳家各位に於かれます。その所屬團體の有無をとはす擧つて歡迎に參加せられんことを切望いたします。

(詳細は發表誌の柳社につき往復はがきでお問はせ下さい) —



「寶の帖」漫興

二 貳

蛭 子 省 二一

(13) 脇差は舟に、預て寶寺
寶寺の句はかなり見出し得る。
寶寺今涌く物は水ばかり
正直に 大工の通ふ 寶寺
岡取のきたなく拜む寶寺 (眉二)
傾城の聞はしたかる寶寺 (童初)
むく起て雉追ふ犬寶寺 (蕪村)

補陀洛山寶積寺といひ、山城山崎天王山腹に在る。什寶に打出の小槌あが、故に名けられた織留二に、「或る時山崎寶寺のほとり名けられたうけ賣して出家かよひの商人——十四五年のうち山崎の長者となり、内蔵にはよるづの寶寺うち出の小槌は目前の油槌と心得て——」とある。大天數二には

身につかぬ所をのぞむ寶寺
かり衣裳をば打出の小槌
新年初詣で賑ふ。

(14) 法輪寺、くるる、櫻に片明り
(15) どの道も来て、も榮種の寶林寺
寶林寺があるかないか調査が出来ぬ。多分法

輪寺のアテ字であらうと推考して列べて置
輪の放下僧にも「面白の花の都や西は
法輪嵯峨の御寺……」。有名な文句であるから
用文章其他にも利用されて居る。嵐山渡月橋
の南に在つて、虚空藏菩薩をまつる。境内の
落星井は道昌僧都に因縁がある。拾遺都名所
圖會には、「此地いにしへより櫻花がすく
ありて、彌生のさかりには都下の騷人ここに
詣し、あるは大堰の川邊にやすらいて酒をす
め、めで、前句の慧真ひといつて、十三になる
四月十三日は智慧のしんが賑に浮ぶ。
子女を持つ家人は、虚空藏菩薩詣りをする、
これを十三詣といふ。十三種の菓子ひさぐ店
列び、供物となし又土産物とする。參詣後は
決して後ろを振り返らない、智慧を失ふと傳へ
られる。

浪人の心で廻る法輪寺 (武四)
春寒く廻り人ない法輪寺 (武二)
急ぐ時田の中を行く法輪寺 (武十五)

(16) 七大寺、いづれ劣らぬ秋のくれ
西大寺、興福寺、東大寺、元興寺、法隆寺、

藥師寺、大安寺を七大寺と云ふ。——(十大寺
は弘福寺、四天王寺、崇福寺を増す。十二大
寺は法華寺、西隆寺を加ふ。尙ほ十五大寺も
ある)。

(17) 寶藥に、人立のなき西大寺
寺は大和生駒伏見村に在る。西大寺御福とい
ひ參詣人に點茶を饗するは、人の知るところ
此寺の秘劑に豊心丹俗に西大寺と稱する丸
藥があつた。
一代男二、管紙のうるし判の項に「國本に歸
るよしの名殘として、二月堂の牛王西大寺心を
付けて遣はし侍る的可笑しき奴にて、故里
の山の神見てなごりふるうたら是れにて落
すべし」なごある。

手のひらの赤いまく西大寺 (武十五)
すくも火に、壽夢殿煙る深代寺
そげうて、揚て、和尚着替る

(19) 深大寺は江戸より七里、中野の先きで。柳雨
卯木兩翁の著書には、同じ四句が掲げてある
棒の手を馳走に見せる深大寺

深大寺棒の上手を客にみせ
深大寺うちめん棒で馳走なり
深大寺直ちに打つのが馳走なり
今でもあの地方からソバは出ない事はない
けれ共、最早名は忘れられてしまつた。

(20) 罪深き木の端の身の衆生縁
木のはしは、とるにたらぬ物の意。枕の草紙
に、「思はん子を法師になしたらんこそ、いと
心苦しけれ、さるはいとたのしきわざを、唯
木の端などのやうに思ひたらんこそ、いとほ
しけれ」

木の端の坊主の端や鉢叩 蕪村

(21) 髪斗法には、入らぬ鉢叩

十一月十三日を空也忌とす。上人が東國遍歴
に就かる、際、老ひたれば再び歸る事はある
まじとの仰せに、十三日から四十八日間空也
堂僧が瓢をならし杖を敲いて、洛中を修行し
たものであるが、一獵師が上人の徳に因り僧
となり、其の後裔が鉢叩だと傳へらる。有髮
妻帯の徒で

野郎が坊主かわからぬは茶筌賣

茶筌を賣り廻つたのもある。瓦礫雜考には
圖が載つて居る。風采は色々と移り變つた
しい。閉田耕筆より、鉢叩と云ふもの四條坊門
油小路極樂寺より出、住僧は法衣を着、袈裟
をかかけて、淨家の和尚のさまなり。是は一蕩
とぞ。其下はつれの半刺たる頭にて法衣の上
ミ計とみゆるものを着る。いとあやしき姿な
り。然るに真享比の板本にて、色々しき姿な
給がきたるものには、素袍の上に鷹羽の紋付
たるを着たるさまなり。其後よく知る人の話
をき、しに、衣の上のごときものに改めしは
元祿以後なり。彼鷹羽の紋も定まれる事、萬

歳の橘の紋の如しとならん。是は俗形相應に
して改たるは異ざまなり」

(22) 木挽も山を下る臘八

釋迦が檀特山にて成道された臘月八日の略、
禪寺では重きを置き、温糲粥五味粥をくふ。

臘八や八瀬の薪も山を出る 麥林

(23) 御忌詣心の趣を呷て

着筋るを誓のやうに御忌小袖

(24) 着倒の目移したる御忌詣

(25) 着倒の又もや御忌にきそ始

法然忌——一月十八日から一七日晝夜別行
の法事が知恩院にて修せらる。(今は四月と
なる)。そして辨當始といつて、この法會から
京師人物見遊山のシーズンに入ったもの、東
福寺岡山忌を辨當納とした。

芝三緑山の鐘は、扇で寸を計つて驚いたとい
ふ。

御忌の鐘女扇で事足らず

上總まで聞える江戸のうなり聲

八郡の空の霞や御忌の鐘 召波

「大佛の鐘も大いけれ、知恩院のかねまさ
れり、かたちひらたくて雅ならず、鐘の響よ
きは祇園是第一なり」(飄旅漫録)

(27) けふも祇園で聞し入相

(28) 大佛の鐘にこわい石打て

(29) 我が鑄し鐘に都の秋の暮

聞く方でも聞かせる方でも、感は等しいわけ
だて撞た鐘に身震ひ (武九)

(30) こらしめの旅と思へぬ京へ来て
現代的によむと、こらしめの旅と思へぬ巴里
にて目移りかする事であらう。

「げにまこと京は着て果て、大阪は食ふて果
てるとかや」(元祿曾我物語)

着倒れの地名に叶ふ綾錦
奈良の都も少し着倒れ (武八)

(31) 蛇は皆飲むで、仕廻て、鴨の贊
澤田博士が郷里、奈良縣北葛城郡五位堂村を
中心とした界限の昔譚を集輯された冊子を
頂いた。中に百舌鳥の話がある。キチ〜モ
ー、蛙や鱒を、木の枝に突き刺しておい
て、冬の日の餌の用意にのこしておく、こ
の鳥は、いつも雲を目印にして刺しておくの
で、雲が動くのでその刺しておいた餌もわか
らなくなるのだといふ」と。面白い感情が含
まれて居る。夫れを鴨の忘鴉、鴨の礫、鴨の草
葦、鴨の贊刺など云ふ。トカケ、蛙などは常
にみるところであるが、稀には蠅蝠もあるぞ
うだ。拙宅へはたえず鴨が来るので、雀など
羽ばたきをして、囀りさわぐ。

(32) 蛇の面う出す、錦木の中
(33) 夜の雨、雉子煮る、鍋に蛇落て
(34) 娘もらひに、蛇のかり衣
(35) 蛇見込む女に、倫旨給はりて

蛇關係の作にこんなのがあつた。蛇の衣は脱
殻の事。蛇が女を慕ふ話は松屋筆記、沙石集、
明良洪範、今昔物語等に出てるが、(35)の倫
旨給はりてが判明せぬ。(一月上旬稿)

各地柳壇

＝れ割を向るあちのい＝



本社 二月例會

二月六日

於 日本橋俱樂部

▽立春も越えたと云ふに 今宵の寒氣は峻又酷。本格的の冬は今からで御座ると云ふ火鉢に背を丸めて作句に耽る。席上配布のプリントは昨年中例會出席回数、統計と最近例會に於ける各題三光の句を集めその成績を高點者順に連名した頗る念入ものである。

▽來會者 — 琴人、一久、鐘生、綠波、蝸牛、えい、な、機見女、明暗子、二南、寛柳、鮎美、小柳子、青踏、緩勾配、葉平、かほる、秋平、柳甫、白柳子、變人、龍一、柳次、正さだ、二、水車、艸樂、四五磨、一水、靈壺、さだ、夕鐘、勝二、小松園、豆秋、方眠、古木、壽枝女、秋無草、夢裡、白瀧、煤太郎よし、かず、岩雄、鶴峯。

▽本年度例會行事たる同人の講演 第二回

として松盛琴人氏演壇に立つ。「感想断片」と題して約卅分間終始一貫熱意のこもつた快舌を擅にして喝采を博す。(二南記)

抗 議 互 選

戀人の 抗議 寫眞の 悪い 事
抗議書へ 四角四面の 字を 並べ
煙草の 火すて、抗議へ きつとなり
無力とは 知れど 一人の 抗議なり
抗議して 相手の 力を 瀧踏する
抗議する 事に 焚火も えつくし
豫期通り 社長 抗議へ 姿なし
獨断へ 不平 直ちに 持込まれ
アメリカの 抗議の 先を スフアルト
女房へ すまぬ 抗議の 先に 立ち
一と言も 云はず 抗議に 顔を見せ
奥様へ 抗議する 程野 暮でなし
抗議する さし 呼鈴を 押す
思ふ事 一寸も 云へぬ 抗議なり

蝸牛 緑波 機見女 一水 艸樂 變人 四五磨 夢裡 さだな 柳次 かほる 緩勾配 青踏 方眠

我が犬へ抗議をされる覺えなし
抗議したいなと思ひ天井見
抗議しに行くカーバーの襟を出て
ちよこなんと座つて抗議小さくぬ
幼稚園可愛い抗議持つて来る
何べんも抗議を出して埒あかず
うなづいて軽く抗議を否定する
壁越しに聞えよがしの抗議来る
抗議々々の中に地下鐵工事進み
長や中の抗議うん／＼聞て去に
抗議する窓にぬつと顔が出る
抗議むなしく溝板を踏み
一片の抗議代表役が濟み
抗議ふと險の滲むのを感じ

不 便

不便利な階段の音に生きて行き
不便ですよと膝をくづさせ
病む母に夜汽車もぐな出てしまひ
不便とは別に高擧續くなり
不便にも馴れた手垢の定期券
獨り身を取散らかして不便がり
動かうとせすに不便を愚痴るなり
不便さへ腹が立つ程棚を吊り
終電車不便な人が殘される
不便だつた事なご思ひ汽車の窓
炭をつぎ不便を笑ふ父なりき
更生に不便も生きた道と知り
女房に聞けば不便なこと云ひ
不便さをわびすき焼の箸を割り
不便さも故郷へ来ればなつかしく
二人で住めば不便を忘れてゐ

蝸牛 豆秋 變人 水車 明暗子 鐘生 緩勾配 青踏 さだな 鮎美 同 琴人

南選

(人)たまに來る人が不便を褒めて去に
 (地)わが家の不便を知り下駄をはき
 (天)代筆を頼む不便を云ひきかせ
 (軸)叱る氣で行け不便な家を持ち

花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形 花形

明暗子 かげろふ 古木 二南
 選 花枝女 五磨 夢平 小柳子 寛柳 豆秋 水車 柳甫 方眠 夕鐘 里十九 蝸牛 白柳子 掉二 琴人 同人 豆秋 勝二 棋太郎 かげろふ

送金 送金を断たぬ氣性の姉が居る
 入院を知らずまじ借りて送らう
 送金の便りに添へて叱つとき
 送金が絶ゆると縁が切れるなり
 送金の夜を子の夢妻の夢
 送金に今日も寢床で菊池寛
 送金を頼む手紙の續をすり
 送金へ不景氣だけが續くなり
 送金をすませて夫婦お茶を飲み
 金が來ず今日も圖書館通ひなり
 送金をしてサンパツをして歸り
 くやみ状の中に一圓札があり
 これつきりと云ふ送金の封を切り
 (人)送金の返事は嫁の事も書き
 (地)送金をして生活の肩を引き
 (天)十七の千の送金のいぢらしき
 (軸)送金をしてごのむときめて

結 美選 青踏 寛柳 壽枝女 葉平 勝二 一水 豆秋 夢裡 四五磨 變人 明暗子 かげろふ 同 古木 青踏 きたを 結美 樂選 鐘生 靈壺 棋太郎 結美 里十九 壽枝女 棹二 柳甫 夢裡 水車 一久

國寶は案内人は指をふれ
 薄きたない家の寶に糸圖あり
 國寶の瓦へ雀巢を作り
 寶刀は半分抜いて飾られ
 寶物の埃り恭しく拂ひ
 寶物に茶菓附きと言ふ觀覽料
 子寶をあへげきかされる友に逢ひ
 子寶の双兒のやうなもの坐り
 成り上りこんな寶も見せられる
 子寶を連れ來てある春の丘
 (人)寶物捧げる足を危なかり
 (地)寶藏何處やら寒い風が吹き
 (天)國寶の佛の鼻がかけて居る
 (軸)文獻の見當らぬ寶を持續け

兼題 峠 琴

言傳をされて峠の茶屋を出る
 悲しがる戀のは見上げられ
 心臓が弱く峠は話も有る峠
 よく戻つて來たと峠へ自嘲する
 峠からさよならの村へ涙ぐみ
 再興を誓ふ峠に時雨する
 落葉ふみしめて峠を堅く降り
 自轉車で峠を越した鬮の値
 馬の嘶き峠に消えて晝
 二疊程の峠の茶店新らになり
 愛執を振り切つて峠を越へてゆき
 すみれ 輪別れにの峠
 峠茶屋道をきかれることに立ち
 峠茶屋スキーの出來る旗をたて
 峠越したと醫者が笑るていに
 四十の峠冷めたい汗が出る

緩勾配 葉平 豆秋 同 小松園 同 秋無草 同 鐘 同 夢裡 かげろふ 嶋牛 同 秋無草 同 豆秋 同 同

緩勾配 葉平 豆秋 同 小松園 同 秋無草 同 鐘 同 夢裡 かげろふ 嶋牛 同 秋無草 同 豆秋 同 同

雲行が早し峠を下るなり
なつかしい我家が見えてゐる峠
峠まで来て決心は立ち止り
敗徳者となつて峠を下りて行く
汽車迄の道を峠の茶屋で聞き
峠から見れば平和に暮れる村
兒の病やつと峠を越へて春
ふるさとよ、さらば峠の落ち椿
人生の峠酒あり女あり

川柳梅田支部句會 (大阪)
雜誌社
一月十七日夜

於里十九居

兼題 眞 似 水 谷 鮎 美 報
延若の聲色顔にしわをよせ 雅 彦
物眞似が上手で今日も一人もて 坊 茄 子
キートンを眞似て彼の女へ逢ふ 夕 鐘
喜多村の聲が上手に酔ふてゐる 觀 月
猫の聲眞似て末の子よく肥り 沐 天
自他共に許す辰己の忠次なり 里 十九
眞似ては、焦つてゐる 美
父の眞似子の眞似母のよく笑ひ 同 美
(人)お主人の眞似を咳ははじめ 新 水
(地)お客の眞似を叱り茶をすゝめ 觀 月
(天)炭をわがらの眞似に夜が更 鮎 美
兼題 賣 聲 天 選
賣聲へ音をたてゝるゼニアイキ 鮎 美
金魚賣り寝むけをさそふ眞夏の日 坊 茄 子
賣聲のいよゝ冬の聲と夏なり 觀 月
賣聲はともかく大きな聲でゆき 里 十九
賣聲へさからふような雨が降り 同 美

(人)賣聲の氣ちがひじみた赤げ
(地)花賣りの聲もやさしい京訛り
(天)賣聲へ思ひの手が動き
席題 地下室 觀
地下室に阿片をすつた夢を見る
地下室で味噌百グラム買ふて去に
地下室の話は壁に突あたり
地下室を残して全部建ちあがり
はち巻をして地下室を掃きに下り
地下室に戀の文が燃へてゐる
地下室へきて迷ひ子の泣いてゐる
(軸)支那服を着て地下室へ降り來る
席題 水 洩 里 十九 選
迷ひ子の水洩巡査ふいてやり
水洩の子守に道を教へられ
代稽古水洩の弟子叱りつけ
水洩の背中灸をすへてゐる
水洩をすゝりかすの子漬けに下り
(軸)校長の訓示に先生の水洩
兼題 夜 道 鮎 美 選
嘘ばかり喋り夜道のおもしろさ
夜の道ライトの光りふりかへり
おもしろい男が夜の道を行く
空想へ夜道いよゝ暗うなり
(人)昂奮の夜道を急ぐ靴の音
(地)極道と母は夜道で出合ふなり
(天)魂を呼びつゝ夜の道白ろし
(軸)夜の道母と一緒に戻るなり
兼題 瓜 び き か ぼ ろ 選
丸額の字が瓜びきの唄になり 鮎 美
瓜びきへ妹藝妓遊びに來 坊 茄 子

川柳雜誌社
神戶支部 新春川柳大會 (神戶)
一月十六日 於八宮神社 西村明珠報

瓜びきのやるせなきをば誰か知る 同 美
瓜びきの前に岡惚れかたくゐる 沐 天
口笛の音に瓜びき三味をおき 里 十九
自暴酒のふと三味線を出してくる 同 美
瓜びきの外は春雨しきりなり 夕 鐘
瓜びきのまだ寝るのには早いなり 觀 月
瓜びきへ新聞代を取りにくる 同 美
(人)瓜びきは母の久しいものにと 夕 鐘
(地)瓜びきへ角帯の弟來てるなり 沐 天
(天)瓜びきに亭主は情夫の御にゐる 鮎 美
兼題 辭 典 五
辭典引く父のめがねの鼻におち 坊 茄 子
男二十才新語辭典をもてあそび 沐 天
詰襟の辭典を提げてゐる寒さ 觀 月
まけん氣になつて辭典を持て來る 同 美
獨り者辭典と夜の壁があり 同 美
代筆の辭典をめぐる こと多し 同 美
兼題 曉 二 南 選
曉の富士へ混んでる食堂車 笹 舟
曉の星に知つたる氣の弱さ 明 珠
鐘が鳴る度に曉廣くなり 卯 生
曉の臺所へ母そつと立ち 南 耕
曉の氣配に氣附く妻の里 九 葉
曉へゆふべの儘の金屏風 か ぼ ろ
曉へ人と馬との氣が揃ひ 重 陽 子
國民として曉への期待する 同 美
(客)曉の灯へ牌の色濁つて來 亂 耽

榮吉、九紫、鐵花人、兩人、暮秋、歎月、光朗
改メ哲緒、卷二、天痴人、都之介、玲人、柳人

兼題 野 蓼 津川紫吻選

關十今野黨にあつて華々し 卷二

議長から注意を受ける野黨席 九紫

家内中野黨へ不利な噂なり 大鳥

解散へ野黨として力こぶ 三雷波

總選舉野黨へ凄しい眼が光り 雪丸

彈壓を野黨になつて見逃さず 蓼秋

友情は別で野黨は基をかこみ 雪丸

解散に野黨本部は活氣づき 鐵花人

敢然と野黨なる身の聲が腹れ 喋朗

答辭の語尾へ野黨の承知せず 都之介

騒然と野黨意氣まく控室 同

飯丈けで濟ます野黨の事務所なり 同

(五客)スローガン野黨賑々ぎ程 卷二

(同)いつそ野黨になつた氣の強 蓼秋

(同)野黨又與黨の頃を思ひ出し 粹浪人

(同)風雲の看破野黨の氣が上り 喋朗

(同)大衆を信じ野黨に甘んじる 都之介

(人)運轉手野黨だなあと思ふなり 青磁

(同)速記録野黨は既に殺氣だち 可明

(地)獅子吼野黨日比谷の水を呑 無鐵砲

(天)政綱を掲げ野黨も負けてゐず 砂詩朗

兼題 妙 齡 大空天痴人選

妙齡の思ふ相手は背が低し 鐵花人

妹の美貌に友が殖へて行き 可明

妙齡の頭を押へて斬髪屋 青磁

妙齡へ巡查優しく聞き返し 馬耳朗

妙齡と涙と共に賣られて來 三雷波

妙齡の女の混る寒修行 柳人

妙齡の女同志でよく笑ひ 同

三面へ派手に妙齡美人の死 玲人

妙齡をワルトラガール忘れ果て 喋朗

妙齡の四肢に見えたるスポーツ化 同

(五客)妙齡として奇計ランデギー 同

(五客)妙齡へ野暮な因襲つきまじ 都之介

(五客)田の土に汚れ妙齡つゝがし 三雷波

(五客)妙齡へ父嚴格な目を注ぎ 華雪

(五客)妙齡へニキビ一つが氣に 無鐵砲

(人)妙齡の女が目立つ労働歌 砂詩朗

(地)妙齡をチラトふり向く上等兵 歡月

(天)トハラヒスト妙齡白く朽ちて 喋朗

兼題 啞 多和喋朗選

(佳)啞の子の運動會に涙ぐみ 鐵花人

(同)表情も淋しく啞は一人去り 柳人

(同)啞の子の憐れ乍ら遠さかり 華雪

(同)啞の子の見る繪看板柄の事 大鳥

(同)啞の子を連れて母親仕舞風呂 可明

(同)深刻に笑つて啞の戀心 無鐵砲

(同)啞としてピアノの才を寂し 天痴人

(同)カナリヤに何なづく啞の子の 同

(人)子寶のうちへ啞の子入られる 砂詩朗

(同)口眞似一人にだてでござり乍ら 青磁

(同)啞といふ弱さの中に光る理智 紫吻

(地)啞の目にはかなく曇る春の空 慕秋

(天)啞の目にはかなく曇る春の空 天痴人

兼題 左利き 青磁可明選

(七客)頭梁に眞似るでは左利き 都之介

(同)左利き二疊打つて人氣よし 鐵花人

(同)左利き又叱られる初年兵 粹浪人

(同)左利き彼女に立てストライキ 鐵緒

(同)捕かまふ搦撲は意外な左利き 喋朗

(同)憤激のステツキに知る左利き 同

(人)左利き右で握つてやめにする 青磁

(地)糸巻きに笑はれてゐる左利き 三雷波

(天)左利き母の鉄を物語り 砂詩朗

兼題 同 前 熊野粹浪人選

(五客)左利き名人でむつゝりや 喋朗

(同)左利きやつげり花の活け具合 可明

(同)素人でない業を持つ左利き 玲人

(同)左でも右でもない左利き 青磁

(同)仕上りは矢張り同じ左利き 無鐵砲

(人)憤激のステツキに知る左利き 喋朗

(地)糸巻に笑はれてゐる左利き 三雷波

(天)左利き母は自分のせいにする 可明

兼題 洋 髮 小田無鐵砲選

(五客)折角の洋髮にして待ち呆け 鐵緒

(同)美容院代表的な髮である 青磁

(同)洋髮の呑めば煙草も呑める 都之介

(同)洋髮の母に似合はぬ父が老け 華雪

(同)タイヒスト洋髮として似合ふ顔 紫吻

(人)夏川が好きで洋髮それにする 都之介

(地)洋髮の母に子供は親します 江華

(天)屈辱に堪える洋髮や、崩れ 喋朗

兼題 同 前 大倉青磁選

(佳)洋髮が似合さ子供ないのなり 卷二

(同)洋髮に結はして旦那物足らず 砂詩朗

(同)髭剃つてもらう洋髮眠くなり 三雷波

(同)洋髮の癖を知る朝晴れてゐる 紫吻

(人)屈辱に堪える洋髮や、崩れ 喋朗

鐵緒

喋朗

同

青磁

三雷波

砂詩朗

熊野粹浪人選

喋朗

可明

玲人

青磁

無鐵砲

喋朗

三雷波

可明

鐵緒

青磁

都之介

華雪

紫吻

都之介

江華

喋朗

大倉青磁選

卷二

砂詩朗

三雷波

紫吻

喋朗

觀月

(天)洋装の吞めば煙草も吞めるな
 席題 弱 點 田中雪丸選
 (五客)生徒から問はれ研究中と逃げ
 (同)弱點は弱點として智慧があり
 (同)多数決モリ觀念の眼を閉ぢる
 (同)親友に泣く弱點を見透かされ
 (同)弱點を抜けば立派な男です
 (人)見抜かれた戀弱點にされても
 (地)弱點へ唾を呑んだり被告席
 (天)弱點が有つて社長の弱く出る
 席題 同 前 福田九紫選
 弱點を突けば黙つて注いで呉れ
 弱點を新妻見られまいとする
 繼母の弱點を知る 淺ましき
 (人)連ッ子の方を叱つて詫をさせ
 (地)弱點へ付けこみ無理を通させ
 (天)弱點を知つてゐる様に犬が吠え

都之介 大鳥 三雷波 可明 紫 叻 巷 二 喋 朗 無鐵砲 九 紫 秒詩朗 華 雪 同 明 無鐵砲 三雷波 無鐵砲 二 巷 人 雨 九 華 可 砂 詩 朗 哲 緒 柳 人 馬 耳 郎 玲 人 三 雷 波 天 痴 人

相場師にさても戦争面白し 喋 朗
 がた落ちの相場血走る眼が二つ 同
 没落をしても目につく相場欄 都之介
 する氣なら相場もやれる未亡人 同
 川 柳 梅田支部旬報(大阪)
 雜誌社 川村觀月報 かほる選
 五貞樂を觀に温泉へ孫をつれ 坊 茄 子
 温泉瑪ドテラ 姿で土産買ひ 同
 ち鬚へ天然の湯氣香り立ち 同
 温泉で腕車にのるも嬉しくて 同
 温泉に來て名案に微笑みく 同
 温泉で吾が一生を考へる 同
 温泉へ舞妓と旦那の氣が揃ひ 同
 温泉の便りのるげもまじるなり 同
 清元の三味を温泉宿で聞き 同
 湯の街は葉櫻ばかり出養生 同
 温泉の名所の一つ動く岩 同
 湯の街に竹のパイプで煙草吸ひ 同
 効能のほかに温泉遊ぶとこ 同
 温泉の景色ゆつたり降り 同
 (人)温泉の湯元は細い道をゆく 同
 (地)温泉へ若い男がひとり來て 同
 (天)温泉を今日うれしくもほろ酔い 同
 (軸)温泉を出て首巻を思ひ出し 同
 近 眼 かほる選
 近眼になるよき電氣下げてくれ 長 坊
 近眼鏡のマガムしわを知つてゐる 同
 目を細くして近眼だんれんと言ひ 同
 近眼の女インテリらしく見え 同

近眼とは惜しいこの娘の器量なり 夕 鐘
 もう一べんみなほしてゐる近眼鏡 同
 びんつけが匂ひ近眼本を讀み 同
 つきあたる様に近眼のぞきこみ 同
 (軸)丸がりにして近眼の色白し 同
 餘生をば樂にさすよと弟言ふ 眞 坊
 燈明のゆらぎ餘生の安らけき 同
 うらゝかき父の餘生の背伸して 同
 餘生まだ慾は多分にあるの也 同
 子に世話をかけるばかりの餘生也 同
 恩人の餘生へ支那の酒が着き 同
 秋空へ餘生はかなく變りゆき 同
 恩給へ餘生の艶のいかめしき 同
 放蕩の息子へ餘生の身のさびし 同
 ひかり集 —その六— 水谷 鮎 美 報
 骨を抱いて遠き姉訪ふ 同
 化石となりて白骨は物語る 同
 朽葉重なりて白骨はうれゆく 同
 雲去りて來りて去りて白骨よ 同
 白骨へすゝりなきある松の風 同
 白骨の曉のひかりなつかしむ 同
 白骨を發見空のちぎれ雲 同
 白骨を見つけて廣き枯野原 同
 白骨はかく魂ゆれてゐる 同
 白骨の恨は多き齒の白さ 同
 白骨を見つけた村の子が騒ぐ 同
 白骨のもろくこはれし陽の光り 同

白鳳川柳會一月例会(堺)

南草路報

兼題穴(續き)

路 耶選

正月の夢にやつぱり鑿を持ち
おとし穴家に歸つて氣が咎め
穴藏のやうに暮して舊家なり
絹針へ一苦勞する屑の皺
月の世界に穴があらうが無か
(人)何氣なく覗いた穴の花ざかり
(地)知らず知らずに墓穴掘り居て
(天)穴うめに俺等の首も滅るまで

鶴町支部 聯合新年句會

美夜路

一月十六日 於金井居 熊谷紅報

汽笛 互選

汽笛聞き失業の朝を寝る
あせつてる病氣へ汽笛よく響き
汽笛をば聞いて女工のコンパグト
物狂はしいばかりの汽笛なり
鳴つて居る汽笛へ父の歸り待つ
寒空へ汽笛が細しを替へ
海の青さよ汽笛が響く
特急が通る汽笛の桑畑
立たずめば汽笛落葉と消えゆきし
さまんゝの音で鳴りだす西九條
病んで居る耳へ汽笛のよく響き

岩石 艸樂 吾水 正路 小柳子 水車 青踏 紅居 子元 小柳子 互選 夢中 子元 白峯 結美 峯美

残り火へ銚子持つ手の酔ふたまゝ
残り火を貰ひに降りる夜業なり
残り火に水筒の水掛けて探して
残り火に餅をば掛けて手内職
残り火を見つめ心のやるせなき
残り火を上手に妻は吹きつける
残り火に女中の欠伸寒く更け
残り火へバットを付けて考へる
残り火へ夜業歸りの手をあぶり
残り火へまだ爛瓶の慾があり
残り火へ話もつきた大欠伸
残り火をかこみ相談まだつき
残り火を今たゞされる刑事室
残り火へ佛壇の菓子下げて来る

錦石 水車 秋月 茂草 吾石 岩水 秋月 變人 柳美 紅柳 同石 同石 錦石 雅幽 石選 寬柳 岩石 滋芳 艸樂 青踏 變人 水車 白峯 夢中 一笑 寬柳 鮎美 吾水 茂草

(同)視線をげそむけて彼女笑する
(同)始めての雷に視線の遠く居る
(同)眼に見ゆる限青き獨り居る
(人)視線から離れてほつと息を
(地)洋装の美人視線を受け流し
(天)冷淡な視線をさけて手を抱え
(軸)令嬢の視線に光るダイヤ有り

吾々の名譽と長屋寄つて来る
兎も角も長屋名譽を取りかこみ
紋付は名譽をつける今日の會
名譽は旗と軍歌で見送られ
入城へ名譽の軍旗頼もしく
金も出来名譽も出来て死んでゆき
一人子は名譽の戦死してなるなり
名譽今マゲネシウムの中に立ち
其名譽場末に光る勳八等
名譽の顔で田畑へ親しまん
(人)名譽ある義足の痛む冬の朝
(地)日の丸に埋めここの我が家
(天)佛壇へ名譽は小さうまつて

悅洋 紅美 鮎洋 悅笑 卜居 錦石 馬選 雅幽 夢中 白峯 吾水 同元 子元 白峯 水車 同車 紅人 鮎美 變人 小柳子 幽選 岩石 子元 夢中 艸樂 岩石 木馬 艸樂 白峯

更生へハッキの香りあるもよし
(人) 更生の朝へ女房もたすき掛け
(地) 更生の意氣に日の出を待ち切れ
(天) 更生の春をホブラと待つ居る

松の内
水

松の内父も混じつてかるた取り
松の内嫁の落度も眼をそらし
松の内牛の手綱も押へてやり
松の内千日前で押されて来
松の内ですと圓たく値切られず
松の内らしく長屋も飾つて居
病む弟も御雑煮を祝ひましよ
松の内染しき頃の友と呑む
大びらに松の内じやと呑みつげ
松の内一人淋しい或橋
(人) 號外へ酔ふては居ぬ松の内
(地) 松の内酔ふて戻つた日を數へ
(天) 出稼の父も歸つて松の内
(軸) 拾屋の待つて居れない松の内

兼題 同 志 紳

水車 變人 青踏 一笑

苦學同志の二階を蚊がせめる
遺言へ同志の顔が皆んな寄り
耳打ちは同志へ同志へのびてゆく
趣味同志やつぱり君も獨り者
同志又花火線光のやうに消え
生前の同志に淋し墓であり
入口をお互同志の暇がいり
ピラを貼る同志へ街の灯がゆれる
たつた一人同志の顔のたのもしさ
同志を交へて俺も轉びかけ
巡查なら巡查同志で笑ふ事
ストライキ同志の名まへみを書き
同志なり顔も知らずに交通し
その後を語る同志にある白髪
(人) 同志同志メーデーの砂嘴を
(地) 裏切りし同志小い隅に居る
(天) 真剣な祈りて救命軍同志なり
(軸) 眞剣な祈りて救命軍同志の戀

寛柳 夕鐘 變人 水車 鮎美 茂草 紅柳 寬芳 滋芳 木馬 元山 悅洋 沐天 蝸牛 青踏 茂草 青踏 美選

(天) 黙々と親切な人辻を折れ
(軸) 親切な人へ雀の轉するよ
西條柳壇第一回句會(愛媛縣)

一月二十四日 緋屋町 於正宗
席題 刻 五
選

悦洋 夕鐘 秋月 思案坊 岩石 同 白峯 謙公 子元 青踏 沐天 茂草 水車

親切にされて帽子を忘れて来
親切な傘が噂となつてある
親切にされた女の手の温み
親切に教へてをれば遅刻する
親切な人だと思ひ振りかへり
親切な人は無學に育つて来
親切へ涙はかきりなく流れ
親切に陳情だけに聞いてやり
親切の指す彼方に灯がともり
親切な肩に夜露がふりかゝり
(人) 親切な茶店寄せ書して戻り
(地) 親切の車押す手が酔ふて居る

小柳子 錦石 夕鐘 青踏 變人 青踏 小柳子 水車 蝸牛 變人 夢中 錦石

達年をほめられてある集金人
集金を断る事も女房なり
(人) 集金を今日もあの手で断はられ
(地) 端しただけ値切つてある集金人
(天) 結局は呉れずお世辭も無駄
席題 心 中 一 鶴 選
蘇生した一人は變な眼で見られ
(秀) 啄木の詩集心中の連れにされ
席題 銅 貨 都々 城 選
一錢を貰つて坊やひざを降り
銅貨でもあればとホケッへ手を入
(秀) 貯め心銅貨を見れば筒に入れ
晴比古 晴比古 晴比古 晴比古 晴比古
虹 一 虹 一 虹 一 虹 一 虹 一 虹 一 虹 一 虹 一 虹 一

(秀)豆腐屋の呉れる銅貨はぬ^わてる

(秀)風呂番へ又銅貨を替へに来る

(秀)旅立ちへ財布の銅貨覗いて見

(軸)銅貨よお前が一番知つてゐる

席題 手 拭 英賀夫選

咽喉しめた手拭がある豫審室

風呂歸り下げた手拭凍つてゐ

一寸した傷へ手拭の端を裂き

黄い手拭が来る温泉の町

(人)働く事の神聖よ手拭を買ふ

(地)手拭を肩に子分は並んで来

(天)手拭が其日の汗のほごを知り

(軸)手拭が證據で犯人足がつき

席題 信 心 虹

他の目にをかしい程の信徒なり

信心の歸り乞食へ蕙んでゐ

玉砂を踏んで信心伏し拜み

信心の深き真面目を信じられ

大病が癒へてそれから擬り初め

(軸)大病を佛にすがり醫者の母

席題 露 路 孤 鶴

露路住ひ横町の犬におごかさ

露路裏に住んでる人の資本論

踏板的露路ぬかるとび散らし

露路内へ仲居らしいが尋れて来

子の遊び露路の狭さをやつと抜け

(軸)眼まき露路へ逃げ込む大人癩

英賀夫

同 孤 鶴

都々城

虹 夫 選

一 鶴

夜 舟

都々城

晴比古

一 鶴

孤 鶴

英賀夫

一 選

都々城

英賀夫

同

夜 舟

孤 鶴

虹 鶴

一 選

夜 舟

一 選

夜 舟

都々城

同 孤 鶴

一 選

夜 舟

同 都々城

善人が小使鍵をあすけられ

早死をして善人はおしごられ

口敷を言はず善人好く動き

値切らぬで唯笑つてるお人好

善人へネオンサインがまばゆくて

(人)何一ツ言はず善人席を退き

(地)善人と言ふに出世のおそい事

(天)善人の金を拾ふたあはて様

(軸)善人の時折喰はぬ日もあつて

兼題 不 平 英賀夫選

妹の不平は毬が小さいから

待たされる不平石なぞげつて見る

義理故に不平も言へず酒を呑み

不平と不平又會合をする

黙つて、不平はつるばかりなり

甘い仲不平も言つてすれて見る

米代も知らず間借りのマルキスト

(人)縣廳をめざす不平はわらじ

(地)不平人自分の事に棚に上げ

(天)其夜は社長の家に石がとび

(書)不平はあれど明日の糧

華水居偶會 (一月廿三日朝)

席題 火

女の瞳落ちて火鉢の火が崩れ

マッチの火ごめんない鼻へ

股火鉢ともかくいぶる物をとり

アイロンの火が消えぬ晴衣なり

風柳

英賀夫

同

晴比古

英賀夫

晴比古

孤 鶴

英賀夫

虹 一

英賀夫

虹 一

晴比古

晴比古

夜 舟

一 鶴

都々城

風 柳

晴比古

虹 一

孤 鶴

虹 鶴

英賀夫

華 水

同

同

同

川柳雜誌 みるずく會同人會

松江支部

都之介報

一月十五日夜

降りしきる雨を聞き乍ら壁土の香もまだ新

しい柳人居にて柳談に作句に樂しくも和か

な一夜であつた。出席者九名

席題 雨

自動車逃れる様に雨の街

日曜の氣持嬉しい朝の雨

雨宿り空を見つめて立つて居る

蛇の目傘番傘の雨夜の雨

横降りへ其の約束をくやしがり

雨なれば雨で逢ひたくなつてくる

俄雨公衆電話をしぼし借り

急用が雨を知らせて入つて来

席題 豪 遊 玲 人選

豪遊のそれも淋しい男です

豪遊の不圖淋しさを感じた夜

豪遊の素振り悪事はばれて居る

(人)豪遊の社長會社をつぶす氣か

(地)豪遊へ女將の派手な造り笑み

(天)豪遊のされごごかに暗い影

席題 左 襪 銀 星選

思ひ出は昔ばかりの左襪

丸髷がつんとして行く左襪

或る夜不圖神經質な左襪

柳 人

卷 二

鐵 扇

柳 人

卷 二

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

柳 人

波紋から波紋を生んで巖首となり
 若き身を池の波紋に消へて行く
 波紋迄思案無く、曳かれて来
 吾が描く紋横切る水すまし
 (人)戀心橋の上から見る波紋
 (地)又一つ波紋が殖へた刑事室
 (天)又ナ電を圍む波紋となつて居る

玲人 硯滴 銀星 柳人 鐵扇 都之介

急所から先づ突いて行く裁判長
 口論の急所つかれた顔の色
 すらり、急所を抜ける老獺さ
 内密の急所を突かれた慌て様
 白づくれ乍らごきつとする急所
 笑つてる話急所の事と知れ
 (人)急所今はづれて安堵の眼を伏せ
 (地)觀念の色に變つた、急所
 (天)突つ込めば果して變な苦笑

玲人 鐵扇 柳人 都之介 鐵扇 柳人

嘲笑へ眼をふさぐ猿轡
 床板へ齧喰がある猿轡
 猿轡觀念の眼を閉じて居る
 (秀)捨せりふ寒く聞いて居る猿轡
 (同)ヒストルを見せられて猿轡
 (同)猿轡一番巻へ寝むくなり

都之介 同 硯滴 卷二 玲人 柳人

川柳雜誌社 一月例会
 高知支部 本與力町 於碌々庵
 一月十六日 中澤濁水報

席題 牛乳 嫌ふ祖母の顔 柳風
 牛乳の匂ひを嫌ふ祖母の顔 柳風
 牛乳を飲んで、此の身体 花舟

牛乳瓶規律を守る好い暮し
 衰弱は牛乳でもと呑んで見る
 牛乳を嫌ひな母の一徹な
 牛乳の音を相圖に今朝も起き
 牛乳の瓶と朝刊並つて居る
 牛乳の來たを小猫も知つて居り
 (五客)牛乳を一瓶減した今日に
 (同)牛乳と林檎で名士朝がすみ
 (同)赤ン坊の牛乳へ母病んでゐる
 (同)牛乳で育つ赤兒のよく太り
 (同)牛乳を滋養に飲んで別居する
 (人)牛乳の効目半年目にわかり
 (地)牛乳で育つたことを聞かざる
 (天)父母へ牛乳瓶は拗れすぎる
 (軸)牛乳瓶一息で呑むお父さん

春風 柳風 露月 青果 紫白 花舟 悠水 芽柳 濁水 紫白 露月 春風

通譯
 (五客)通譯の何か言うてはうぢと
 (同)テリアル音へ通譯氣をい
 (同)通譯のいる妻を伴れ歸朝する
 (同)カフエで友の通譯もてる
 (同)通譯がカメラに半分撮られ
 (同)通譯へ商談少しを分される
 (地)通譯は切れ目、を樂しませ
 (人)通譯は切れ目、を樂しませ
 (天)通譯はホロツトしく次を待ち
 (軸)通譯も一緒に笑ふ座の空氣

春風 柳風 露月 青果 紫白 花舟 悠水 芽柳 濁水 紫白 露月 春風

兼題 空氣 濁水
 潜水夫空氣へ命任せ切り
 空氣銃しへたげられた音をたて
 空氣にも不平のあつてパンクする
 (佳)浮袋空氣偉大なものと知り
 (同)雑踏の空氣忙しく揺れてゐる

水選 柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

兼題 飛行機
 飛行機で花の名所を知つた、け
 旅客機へ騒ぎ立つてる富士がみへ
 飛行機へ背中のお手々伸び切つて
 飛行機で撒くピラ町を過ぎて落ち
 宣傳機低空をして騒がれる
 飛行機へ話し相手の無い木樵
 飛行機へ雪の峯々晴れ渡り

柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

二月二日 大聖寺 茶撫朗報
 兼題 浮世繪 茶撫朗報
 遠霞富士廣重の色に暮れ
 浮世繪を壁に張つてる獨りもの
 疑もなく浮世繪は見直され
 浮世繪の姉はハッキリ年を取り
 浮世繪の價格が妻に阿呆らしく
 ほの匂ふ浮世繪にある春心
 浮世繪展御世泰平を偲ばれる
 浮世繪に女のもてるやはらかみ
 (佳)浮世繪へ春の心になつて座し
 (佳)浮世繪へ春の心になつて座し
 (佳)浮世繪を別に見る芝居茶屋

柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

兼題 飛行機
 飛行機で花の名所を知つた、け
 旅客機へ騒ぎ立つてる富士がみへ
 飛行機へ背中のお手々伸び切つて
 飛行機で撒くピラ町を過ぎて落ち
 宣傳機低空をして騒がれる
 飛行機へ話し相手の無い木樵
 飛行機へ雪の峯々晴れ渡り

柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

兼題 飛行機
 飛行機で花の名所を知つた、け
 旅客機へ騒ぎ立つてる富士がみへ
 飛行機へ背中のお手々伸び切つて
 飛行機で撒くピラ町を過ぎて落ち
 宣傳機低空をして騒がれる
 飛行機へ話し相手の無い木樵
 飛行機へ雪の峯々晴れ渡り

柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

兼題 飛行機
 飛行機で花の名所を知つた、け
 旅客機へ騒ぎ立つてる富士がみへ
 飛行機へ背中のお手々伸び切つて
 飛行機で撒くピラ町を過ぎて落ち
 宣傳機低空をして騒がれる
 飛行機へ話し相手の無い木樵
 飛行機へ雪の峯々晴れ渡り

柳風 浮城 悠羊 柳風 浮城 悠羊

酔をれて乗せて俚屋夜が白み
酔をればさんぞ驕いでノイチツブ
酔をればごうにか溝を越して行き
（秀）酔をれたまゝ玄關へ届けられ
（人）バーを出た酔も同志肩を組み
（地）満員の電車酔がれ廣う居る
（天）青い眼の酔がれ馬鹿知居る
（軸）酔をればもう呑もう酒を呼び

川柳雑誌社
登ヶ池支部
二月例會

二月十一日
兼題 屋 根 赤 城 晴 夫 報
美 選

山門の屋根うす高く落葉する
屋根ば見てバルコンのランデアー
鐵橋の真下漁村の屋根が見へ
赤い屋根いとゆるやかに煙を上げ
屋根の街空中線と物干しと
（住）ざれさにて屋根の間の道を見る
（同）いつもとは寒ぢちがふ屋根の色
（同）懐かしく屋根が車窓を遠ぼさかり
（同）月青く青く病舎の屋根に汚り
（人）葦葎も屋根に朝陽が射すら
（地）雀等の落着いてある屋根がさ
（入）院 久し

松 松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫
美 美 美 美 美 美 美 美 美 美 美
選 選 選 選 選 選 選 選 選 選 選

よく走る少女であつた淡い戀
少女の死詩集冷たく落ちてある
ハモニカへ唄うてくれた隣りの娘
（ある少女に寄する）
無邪氣さを職業意識の中に捨て
ほつかりと少女心へ灯がともる
重傷の少女へ夢の美しき
（佳）陽のなかに少女の頬の赤椿
（同）夢もなく少女等白い服を着て
（三）光 柿熟す十五を賣られ來言
（同）茶摘唄少女の顔のほてりけり
（同）少女まきまり嘘は云さぬす

覺が住むと言ふ池低く枝が 降り
傳説を信じみかんをむいてある
傳説の巖から覗く水の色
傳説をきいて子供は納得し
石塚が語る二人のロリーマンス
傳説の銀杏殘して町になり
（軸）傳説を恐れ村人手をつけず

寂しさは嘲笑かひて一人寝る
良い事をしてあるんだが笑はれる
泣いて出る後へ嘲笑だけ残り
金貸しへせめてむくあるあざ笑ひ
嘲笑の心の中にある不安
空と水自己嘲笑の日が續く
嘲笑の蝙蝠となる夕まぐれ
（軸）嘲笑はれてと知ても意地が
進軍のラツパになつて軽い足

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓 樓
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
流 流 流 流 流 流 流 流 流 流 流

進軍亦進軍日本軍の勝だ
進軍へ萬歳となる日章旗
今日こそは死ぬぞ進軍ラツパ鳴る
城壁をよちのぼつてる日章旗
雪中の進軍靴が破けて
砲聲とサーチライトの中を進き
喇叭の音たゞ無者羅に走るなり

北陸川柳聯盟句會 (石川)
於小松 上野 錦 水 報
本聯盟は多大なる期待を以て、北陸柳壇に
活躍せんとするものである。

憧憬の頃よ胸帯高く締め
花嫁の晴衣憧憬の眼をうばひ
憧憬の映畫雜誌へ夜を更かし
憧憬の娘へ両親は無事にある
煤煙の下で故郷を憧憬わたる
憧憬がまたいつての長火鉢
憧憬の眼に大阪の裏通り
憧憬が暮つて寫眞取出され
憧憬へスツカリ滅入る春の雨
憧憬であつた都の冷やかさ
憧憬へ母は一層氣をつかひ
あこがれて來た大阪の煤け様
憧憬の二人へ富士の日本晴
（五）客 憧憬の夕へ書齋の窓により
（同）愛らしい憧憬があり乳母の里
（同）男の子みな兵隊になるつもり
（同）憧憬の旅へ寝れないまんなる
（同）憧憬れて來ただけ淋し京の雨

由 由 由 由 由 由 由 由 由 由 由
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
巴 巴 巴 巴 巴 巴 巴 巴 巴 巴 巴
卷 卷 卷 卷 卷 卷 卷 卷 卷 卷 卷
雅 雅 雅 雅 雅 雅 雅 雅 雅 雅 雅
美 美 美 美 美 美 美 美 美 美 美
夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫 夫

(人) 憧れの都に人は捨てられる
(地) 憧れの乙女に春の流し髪
(天) 姉ちやんの様な振袖着たい慾

茶撫朗 水玉 北山人
兼題 湯氣 草 又選

湯氣のない茶碗御通夜の濕つばき
物想ひフツ鐵瓶の湯氣にふれ
臺所の忙しき湯氣の中に爛
忙しさに負けず鐵瓶たぎつてる

柳村 松水 井々樓
茶漬でもいゝ友達の有難味
朝ばれへ茶漬の味も親しまれ
お茶漬に藝妓の顔の一寸減り

味噌の香が湯氣立つてゐる朝の膳美どり葉
湯氣吹いて吹いて女の子の行儀
温泉の街を包んだ香に浸り
子守唄カシメカパーを洩るに湯氣

柳村 松水 富久雄
お茶漬に藝妓の顔の一寸減り
お茶漬にしんこの味を叱らる
(佳) お茶漬にしんこの味を叱らる

仕舞風呂湯氣一杯の湯氣にゐる
(五客) 春の野は干草の色も湯氣
(同) 合羽干す湯氣へ小笹の搖き音

柳村 富久雄 柳村
(同) 悪友の口ぶえ茶漬喰ふと云ふ
(同) お茶漬へ胡坐になつて子を叱り
(人) 待たされても茶漬の音を聞き

(同) 塵芥箱の蓋から湯氣が洩る朝
(同) 寄鍋の湯氣にもつれた箸の先美どり葉
(同) 温情の發露を湯氣に盛つて

柳村 富久雄 柳村
(地) お茶漬にふつと佗々年を知り
(天) かゝはりも無くして茶漬の味
席題 滿洲 北山人選

(人) 蓋とれば和やかに柚香るなり
(地) 産聲は湯氣に浸つてまだ續き
(天) 饅頭がかすかに見へて硝子函

茶撫朗 北山人 北山人
滿洲の便りへ皆んな顔を寄せ
滿洲の噂と覺えつた寒い晩
滿洲を戀で覺えた幼稚園

初雛に所もせまき灯がはいり
喜びの顔へ明るい灯がまとも
電燈の灯影に父の黙々と
灯の前に坐はれば坐はる影を持ち

柳村 松水 井々樓
親一人子一人 滿洲へ通ふ夢
滿洲に立つて男子である誇り
滿洲を思へと布團捲くられる

白粉か怪しく見せ灯が燈り
燭つたまゝに田舎の灯へ馴れて
停電の風呂蠟燭に落ちついで
(佳) 暗い灯にもう手内職馴れ切

柳村 松水 井々樓
滿洲の地圖に替へる課長室
滿洲の號外へ下駄はきちがへ
(佳) 滿洲の遺骨へ日本と見較べ

(同) 蠟燭の灯が暗らい悔み狀
柳村 井々樓 柳村

柳村 井々樓 柳村
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ

(同) 滿洲へ十若ければ行く氣なり
柳村 井々樓 柳村

柳村 井々樓 柳村
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ
(同) 高梁畑馬賊鬼の様に逃げ

(同) 滿洲ごっこ弟を匪賊にし 柳場
大地吟社如月例會 (島根)

二月二日 兼題 姉 綠之助居(羅門報) 綠之助選

姉だけは戀する心知つて呉れ 季 朗
空想を見詰める姉よ何描く 季 美
生活と闘ひ姉は嫁き遅れた 羅 門

久方に姉ちやんと唯泣ぐのみ 海 月
初婚の夢に破れし姉のヒステリー 田 鶴 緒
(佳) 姉に來たレター妹と不審かり 季 美

(佳) 姉として愛しませうと淋し眼 季 美
(佳) 盛裝を脱げば淋しい唯の姉 華 村
(佳) 姉があり妹があり騒がれる 華 村

(秀) 姉を慰めて飢餓線を辿る足 羅 門
(秀) 姉さんの暗のお顔にある 羅 門
席題 訪問 季 美

突然と訪問すれば友は病み 華 村
思ひ出した様に二人で訪れる 華 村
訪問に行けば先生床に病み 華 村

訪問へ帯をしいて出て來たり 華 村
訪へば時計鳴つてる留守らしい 華 村
(佳) 訪問をすれば親指出して見せ 華 村

(佳) 訪れて冷めたき答となつ出る 華 村
(佳) 訪れて冷めたき答となつ出る 華 村
席題 椿 天 選

青春よ椿よ戀よ燃えてゐる 天 選
落ち椿捨ふ乙女の黒い髪 天 選
春が來たその嬉しさに椿咲く 天 選

(五客) 戀の夕暗に乙女椿が咲く 天 選
田 鶴 緒

(五) 落つる椿へ鳥の乙女の感傷
琴朗

(五) 母上と椿の盛る寺を出る
緑之助

(五) げに淋し破戀の如く落ち椿
同

(五) 椿の色あせし雲が低く飛び
羅門

(人) 落ち椿自朝を捨て、かへ下駄
同

(地) 椿のまづかな歸る子守達
同

(天) 椿赤々と亂歩を讀み疲れ
緑之助

席題 罪 羅門選

冤罪の俺へ妻だけ知つてくれ
琴朗

改心を世間は本當にしてくれず
典詩雄

許された罪に初めて責を知る
田鶴緒

戀を得て不幸の罪を知る日
同

(人) 罪の子とすれば此の胎動
同

(人) 不意打に昔の罪をあばれる
同

(地) 呪咀の中に彼女を罪を知らぬ
同

(天) 縦に振る頭瞬間の犯罪さ
同

席題 涙、泪 緑之助

涙脆くなつて年頃とはなりぬ
琴朗

見榮もなく涙が頬をつたはつて
典詩雄

泣き疲れて涙をなめた思ひ出
同

(佳) 忍従の膝へ不覺の涙落ち
同

(佳) 逢へば又涙ぐんである彼女
田鶴緒

(秀) 涙線の冷めたき觸手臘月
羅門

羅門居小集(島根)

二月十一日 羅門報

兼題 裏 緑之助

暇が赤い裏切られし夜の息
羅門

その裏の技巧と知る灯を見詰む
同

春の月——裏町を辿る足
同

厳格な父へ裏門抜けて出る
愁人

(人) 親しさは裏木戸開けて来る
同

(地) 裏こころの裏と表の生活よ
田鶴緒

(天) 裏木戸が開いて訪れた春
同

席題 思 傳、壽朗共選

赤い思想學國一致の秋と知り
雅月

處女性を失つて思想が變化した
田鶴緒

思想には國境がある日本人
同

思想家といはれ戀風な戀をもち
同

國軍犯その貧弱な思想にて
同

席題 電 話 雅月、田鶴緒共選

電話ではよく話してくれる彼女
田鶴緒

凶報へ電話飢へたる如く鳴り
同

白き晝生命線にある電話
同

公衆電話と犯罪と春の街
同

電話帳くつて不安な眼射し
同

笑つてばかりの電話笑はれる
同

電話室から輝いた顔で出る
同

席題 愛 羅門選

友愛も彼の結婚と共に消え
傳重

師の愛に叛き激烈な論陣
同

(佳) 泣かず笑はず此の愛も人の
同

(佳) その愛の極み死が来ようとは
同

(佳) 悲しい愛に親猫が啼く宵だ
同

(佳) 片戀の愛が真紅に色づくよ
同

(佳) 愛すればこそ今日の俺の忍従
壽朗

(佳) 愛する程儼し素直なる妻よ
田鶴緒

(地) 愛を語るには淋しい今の俺
同

(天) 愛人の睫毛はつきりして涙
同

席題 暗 殺 緑之助

暗殺へ去り行く風と臘月
羅門

(佳) 暗殺へ白き夢見てる月だ
同

(佳) 暗殺は意見の相違では済まず
同

(佳) 政黨政治の犠牲よ暗殺
田鶴緒

席題 悠々たる風景 互選

晚鐘の音へ霧が湧いて来た
壽朗

連へ二人が戀のコーラスよ
同

フエルトのそりる歩き春や春
同

バラソルとステツキと春の風景
同

お茶ばかり飲んで日曜畫になり
同

欠伸して又寝轉んで南條
同

松の風詩にして喰ふに困らない
同

大地吟社回募集(島根)

課題 奮 闘 松丘町二選

奮闘の後振り返り汗をふき
蛙聲

奮闘の昔を語る義手であり
同

人並の正月をせん夜業に精を出し
田鶴緒

奮闘の悲喜を裁かん開票日
同

女選論その奮闘の跡がなし
二三鷹

奮闘のいつしか戀が芽生へてる
華村

奮闘の將士に濟まぬ屠蘇の酔ひ
同

我軍の奮闘満洲淨化して
同

曉へ進む心の奮闘ぞ
同

職業へ女性の朗らかな奮闘
同

(佳) 奮闘は朗らかな心となす寝る
同

(佳) 奮闘だハンマーだ爪が油滲む
同

(佳) 奮闘へ今日も辨當が届けられ
同

(佳) 奮闘へ母はちつとも弱くなし
同

(地) 奮闘の或る日握手を求められ
同

(天) 奮闘へ酬はるゝもの汗のみか
同

羅門

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

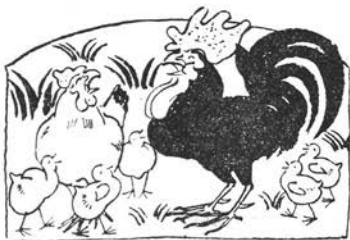
同

同

同

同

同



編輯の窓

霞乃

▼三月に入ると雲雀の聲が聞える鳴尾から、次第に煙の都へと移つて來た本社は此度玉出町でも最も繁華な通りの裏町へ來た入口に立つたら、近くバス開通の十五間道路を右手に控へる事僅かに五六歩、舊居玉出住宅の如く、霜かゝる散居道は見られず、栢榴ほろ／＼と葱居道は踏まれず、詩人の夢淋しさに入る住居ではあるが、今後本社が柳壇の向う上と其社會運出のために、華々しく活躍せんとするには、遙かに地の利の良い場所である。新居に移つてから、路郎はもうひとづ健康がすぐれないので、こんごの編輯後記は私が書く事になつた。

▼本社二月例會は淋しがつた。いつも句會の進行に采配を振つて下さる綠雨さんは盲腸炎で出席されず、山雨樓さんは御家族に御病人があつて欠席、路郎も病臥中の事として、パンは缺かしても、缺かした事のない席上へ臨まなかつた。當夜福田鶴峯さんからお電話があつたので、「よろしくおたのみします」と受話器を掛けた。會場の様子を路郎に傳へるべく二階へ上りながら自稱モダンボーイ松盛琴人さんの老びて猶潑刺たる顔を思ひ浮べた。講演に、選に、披講に、忙しい彼氏の今日の一人舞臺が彷彿として眼前に迫つて來た。二南さん里十九さんの珍しい顔ぶれのあつた。聞くは嬉しい事の一つである。

▼本社新春句會の講演で偶々、私が路郎は癩癩持ちである云ふやうな事を洩したところ、早速それを利用して社會へ惡宣傳をしてゐた人があるが、あれは私のアイロニーで、癩癩持ちと云つても、癩癩持ちに二々通りある事は御承知置き願ひたい。路郎の癩癩は單にきまぐれから來る感情の發作ではない。其證據には結婚後十八年もなるが、頭は愚か、指一本も私は路郎の手で撲られたことはない。路郎の癩癩は正義を正義として押し通さ人がための情熱の發露である。其情熱は自然となつて光るかと見れば、火華となつて散る事もある。いかに熱烈な辯論を以つてしても、相手の頭惱不明晰にして、正義を正義として受入れる事の出来ない場合は、鐵拳を飛ばしても相手を打ち倒されば置かぬと云ふ猛烈さを持つてゐる。然し此情熱あつて路郎あり、路郎あつて此情熱ありである。蒸發性を失つたエーテルは水の代用にもならないものである。なまぬるき湯は口より吐き出さる」と云ふ聖句がちやんと吾等が取るべき態度を教へてゐるではないか。路郎の情熱若し豆炭のいきりとならば、たとへ八人の子をなすとも私は離婚を申し込むであらう。

▼二月四日の夜、カナメ喫茶店の階上で本社同人、社友句會が開かれた。五月が本誌の百號記念に相當するので當夜は句會後百號記念號の編輯の方針とそれに關する催し物に付ての協議會が開かれた。其夜某々川柳家が二階へ顔を現し、「私も一寸開かして貰ひます」と云つたところ、路郎は立所に「今日は社の同人、社友會なんだから、階下へ遠慮してくれ給へ」と斷つたさうな。何のために斷つたか、其意を解せざる彼は勝手な臆測を下して、或る雜誌へ吾等同人社友は神戸支部の件で協議會を開いたと書いたものである。

▼「カナメ喫茶店で川柳雜誌社の同人社友會が開かれるさうな特種があるから行つて見ぬか」と去る柳人の間に往復された書簡を手に入れた同人がある。そんな五月蠅い小新聞記者のやうな仕事をしたければ勤め先はいくらでもあつた。御希望ならば履歴書を一通送られたら。

▼蛭子省二通さんから路郎宛に御親切な御見舞狀を頂いた。社の百號記念の催しには是非とも出席したいが、病弱なので時間の聲をお約束し出来兼ねると悲哀の聲を洩してゐられた。あまり健康でない路郎を夫に持つてゐる私には、單獨の旅行を氣づかばれる省二さんのお心持は實に淋しさの限りである。

投稿規定 (改正)

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全家の雜吟を募る但し女性作家を除く

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第九卷第五號課題

三月五日締切

(各題十句以内)

- ▼近作柳樽 安井ひろし選
- ▼唄 高橋かほる選
- ▼獨身 關本雅幽 木村晃卓 共選

第九卷第六號課題

四月五日締切

(各題十句以内)

- ▼近作柳樽 麻生路郎選
- ▼同伴 松盛琴人選
- ▼ぶらんこ 安西杏三選

每號募集

- ▼光耀抄 麻生霞乃選 (無制限)
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈禮廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

部 金 拾 錢

一 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢

壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

(半々年分以上御送金の方に)

(は投句用箋を贈呈致します)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は郵便口座内阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼御希望により集金郵便を差立てます。御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年 二月廿五日印刷

昭和七年 三月 一日發行

第九卷 第三號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生 幸二郎

發行所

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地 柳 雅誌社 電話替大阪三一五一四番 電話天下茶屋二五七九番

事務所 川柳雜誌社

大阪市住吉區平野西之町八三番地

電話替大阪七五〇五〇番 電話天王寺一一六七番

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内各書店)

(東京仲見世) 玉森堂(紳戸) 米田、後藤、寶文館(函館)

石塚(京都)三宅(松山)弘文舎(石川縣)イコト十

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へば、古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

ガナメ喫茶店

朗らかな心と愉快な顔は
カナメ喫茶店より

大阪市南區疊屋周防町
東入南側

「後の葉柳」分譲

新興川柳の先驅「後の葉柳」の
殘部が少し出て來ました。
同好の士にお頒けいたします。
(一揃郵券十錢) 本社宛

高知支部會
日 毎月十日

高知市本與力町
中澤濁水宛に
會場を問合せられたし

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生
上製短冊一葉金參圓送費不要
作品は入金順に発送、振替
は「大阪七五〇五〇」を利用
されたし(句の希望の方は
お知らせ下さい)

所込申 大阪市住吉區平野西之町
八三番地 川柳雜誌社
短冊頒布係

綠雨居偶會

三月七日午後六時半より
兼題「旅」
會費 不要

本社事務所にある他の柳誌を
見ながら語りませう。
二月は私の病氣で偶會を中止致
しました(綠雨)

場所は住吉區平野西之町八三
(市バス平野線クマタ停留所)
(下車東南約四丁 市設住宅)

懸賞川柳募集
題「姿」 路郎 選
三月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼大阪市玉出本通三の三六
▼投吟 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

月刊 近代女性 (募集)

川柳雜吟五句迄

投句所 神戸市神戸區中山手通七丁目
一七七 日野華水宛

社告

本社の例會案内希望の方は左記
へお知らせをお願ひします
大阪市天王寺區北河堀町三
會報係 福日筆蜂宛

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁こはなりぬ君こ僕
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月廿五日
 昭和七年三月一日發行

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦
ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



いさ下用愛御に直今
 りあに店薬品粧化名有國全

伊豆椿香油本舗

川柳雜誌

(第九十八號)

定價金三拾錢